

長倉宮脇

千葉県横芝町長倉宮脇遺跡発掘調査報告書

横芝町教育委員会

長倉宮脇

千葉県横芝町長倉宮脇遺跡発掘調査報告書

横芝町教育委員会

序 文

横芝町周辺には、古代からの遺跡が数多く分布しております。今回の調査でも、古墳時代から奈良・平安時代と三期に渡っての住居跡が重複して発掘されています。これは、生活環境がすばらしいからかと考えられます。しかし、現在でも暮らしやすい地域には当然ながら埋蔵文化財があります。

開発事業と文化財保護との関係にあっては、各教育委員会、県文化課等で調整してはいるものの、埋蔵文化財は実際に発掘してみなければどのようなものが発見されるかわかりません。なるべく遺跡に当たらないように事業を調整しても、遺跡に当たらないとも限りません。この場合、事業変更ができなければ当然、発掘調査を行なわなければなりません。

しかし、一度掘り上げてしまったものは、埋め戻す訳には参りません。その成果をいわゆる「記録保存」として残す訳ですが、貴重なものですから万全を期して「記録保存」しなければなりません。

今回の調査は、町道坂田達山線改良工事に先立つ発掘調査ですが、この度ここに、貴重な資料を得て、本報告書が刊行の運びとなりました。この成果が横芝町の歴史解明の手がかりとして、また多くの人々に学術資料として、広く活用されれば幸いです。

最後に本調査を行なうにあたり、ご指導いただきました県教育庁文化課の諸先生方、また、発掘調査に従事された、日本考古学研究所の村山さん・中西さん、補助員として従事されたみなさん、本当にご苦労さまでした。心よりお礼申し上げます。

横芝町教育委員会
教育長 井上 武

目 次

序 文

例 言

I. 調査に至る経緯.....	1
II. 遺跡の位置と周辺の環境.....	2
III. 調査経過.....	6
IV. 検出した遺構・遺物.....	7
1. 住居址	7
2. ピット群.....	40
3. 溝状遺構.....	44
4. 表採遺物.....	45
5. 「塚」	46
V. 考 察.....	54
古墳時代の遺構・遺物について.....	54
奈良・平安時代の遺構・遺物について.....	56
「塚」出土の遺物について.....	57
VI. 総 括.....	63

例　　言

1. 本書は、山武郡横芝町における町道坂田・遠山線道路改良工事に先行する、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、横芝町役場の直営事業として、昭和59年6月4日～7月16日まで実施した。なお、本遺跡は昭和57年に伊藤一男氏により確認調査が行なわれ、報告書が刊行されている。
伊藤一男 1983 「長倉宮脇」 横芝町教育委員会
3. 本調査は、村山好文（日本考古学研究所 日本考古学协会会员）を調査担当者とし、中西克也（日本考古学研究所）を調査員として実施し、事務局は横芝町教育委員会内においていた。
4. 本書の実測・トレース・写真撮影は、村山好文・中西克也の両名が行なった。
5. 本書の編集は村山好文が行ない、執筆は各文末に記した。なお、「塚」出土遺物の考察は、藤下昌信氏（日本考古学研究所）に依頼した。
6. 遺構実測図中の水糸レベル上の数字は標高を表わし、各遺構毎に水糸レベルを統一してある。
7. 遺構実測図中の番号は、出土遺物の番号と統一されている。
8. 土器実測図中のスクリートーン（疎）は黒色処理、（密）は赤色塗彩を表わし、断面にスクリートーンのあるものは、須恵器を表わしている。
9. 「塚」出土遺物の銷落し保存処理にあたっては、千葉県文化財センター清藤一順・野口行雄氏に御協力いただいた。
10. 本調査および本書の作成にあたっては、下記の方々に御協力、御指導をいただき謝意を表します。
千葉県教育庁文化課 麻生正信、横芝町役場建設課 池沢安司・海保要、横芝町教育委員会 加瀬盛久、千葉県文化財センター、国立歴史民俗博物館、新成田総合社

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置.....	3
第2図 遺跡の位置（スクリートーン部）と周辺地形図.....	4
第3図 遺構配置図.....	5
第4図 第1・12号住居址実測図（1）.....	8
第5図 第1・12号住居址実測図（2）.....	9
第6図 第2号住居址実測図.....	10
第7図 第3号住居址実測図.....	12
第8図 第4・7号住居址実測図（1）.....	13
第9図 第4・7号住居址実測図（2）.....	14
第10図 第4・7号住居址実測図（3）.....	15
第11図 第4・7号住居址実測図（4）.....	17
第12図 第4・7号住居址実測図（5）.....	19
第13図 第5号住居址実測図（1）.....	21
第14図 第5号住居址実測図（2）.....	22
第15図 第6号住居址実測図（1）.....	24
第16図 第6号住居址実測図（2）.....	25
第17図 第7号住居址出土遺物実測図.....	26
第18図 第8号住居址実測図.....	27
第19図 第9号住居址実測図（1）.....	30
第20図 第9号住居址実測図（2）.....	31
第21図 第10号住居址実測図（1）.....	32
第22図 第10号住居址実測図（2）.....	35
第23図 第11号住居址実測図（1）.....	37
第24図 第11号住居址実測図（2）.....	38
第25図 第11号住居址実測図（3）.....	39
第26図 ピット群実測図（1）.....	41
第27図 ピット群実測図（2）.....	42
第28図 ピット群実測図（3）.....	43
第29図 ピット群実測図（4）.....	44
第30図 表採遺物実測図.....	45
第31図 「塚」平面図.....	47

第32図	「塚」発掘区設定図	47
第33図	「塚」断面図	48
第34図	「塚」遺物出土状態図	49
第35図	「塚」出土遺物実測図	50
第36図	「塚」出土古銭拓影（1）—No.2（和鏡）に伴って出土したもの	51
第37図	「塚」出土古銭拓影（2）—No.3（和鏡）に伴って出土したもの	52

写 真 図 版 目 次

- 図版1 上. 遺跡遠景 中. 遺跡近景及び遺構確認作業 下. 住居址発掘風景
- 図版2 上. 第1号住居址 中. 第2号住居址 下. 第3号住居址
- 図版3 上. 第4号住居址遺物出土状態 中. 第4号住居址須恵器大甕出土状態 下. 第4号住居址
- 図版4 上. 第4号住居址カマド 中. 第5号住居址 下. 第6号住居址
- 図版5 上. 第6号住居址カマド 中. 第7号住居址 下. 第8号住居址
- 図版6 上. 第9号住居址 中. 第10号住居址 下. 第10号住居址貯蔵穴内遺物出土状態
- 図版7 上. 第10号住居址カマド 中. 第11号住居址 下. 第12号住居址
- 図版8 上. ピット群 中. 発掘後の遺跡 下. 「塚」遠影
- 図版9 上. 「塚」近景 中. 「塚」北東区遺物出土状態 下. 「塚」No.1、2出土状態
- 図版10 上. 「塚」No.3出土状態 中. 「塚」No.4、5出土状態 下. 「塚」南西区セクション
- 図版11 第1・2・4・5号住居址出土遺物
- 図版12 第6・7・8・9・10号住居址出土遺物
- 図版13 第10号住居址出土遺物
- 図版14 第11号住居址、P-1、P-28、表採出土遺物
- 図版15 「塚」出土遺物

I. 調査に至る経緯

町道（坂田遠山線）の対象地区的道路は幅員が2m強、最徐行しても車がやっと走れる程度である。

また、この地域は林業が他地区に比べて盛んであり、農林業発展のためにも主要道路の新設が望まれたが、予算などの制約もあり、改良工事という形で実施されることになった。

そこで昭和56年11月11日付けで横芝町長より、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会文書（県教育長宛）の提出があった。

この照会に基づき、県教育庁文化課と横芝町、横芝町教育委員会の三者は、ただちに現地におもむき踏査を実施した。その結果、（宮脇・山際・熊谷・南長山野・上仁羅台）に遺跡の所在が確認された。

その後、確認調査を実施するため、横芝町、横芝町教育委員会、県文化課の三者による協議が県文化課において実施され、確認調査を実施することを決定し、昭和57年12月9日から28日までのうち約10日間実施した。その結果、（宮脇）地先に住居跡を確認、遺物から見て真間、国分期で一部、鬼高期と推定された。

これらの事実から、記録保存か現状保存かで数度の協議を行なった末、工事変更及び現状保存は極めて困難であるとの判断により、記録保存の発掘調査を実施するに至った。

発掘調査は、県教育庁文化課の指導のもとに、横芝町直営事業として、昭和59年6月4日より調査を開始した。

II. 遺跡の位置と周辺の環境

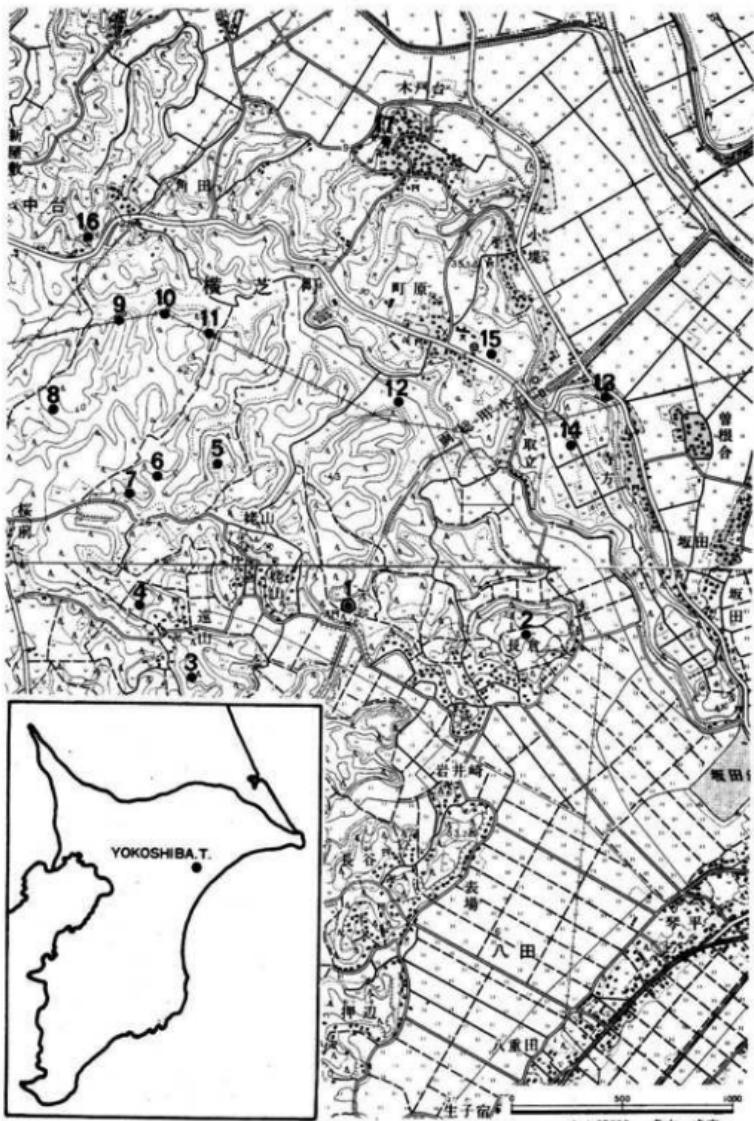
長倉宮脇遺跡は、千葉県山武郡横芝町長倉字宮脇341・342・346番地に所在する。横芝町の地形は、下総台地と九十九里平野から成り立っており、本遺跡の所在する台地は、下総台地と九十九里平野との境目の台地である。本遺跡は、北東側に流れる栗山川と小河川によって浸蝕された樹枝状台地の一角にあり、南側と北側には谷津が入り込んでおり、東側は平坦な九十九里平野がひろがり、水田となっている。(第1図)

遺跡のある台地は、標高35mを測り、水田面との比高差は26mであり、現状は畠地と山林である。本遺跡は、台地の西隅に位置し、平坦地の中心から若干離れている。台地の中央を南北方向に旧道が通っており、その西側は大宮神社の境内となっている。この台地の北側には、馬背状の狭い台地がつづいており、2基の塚が旧道をはさんで存在している。台地の西側は、急斜面をなしている。また、台地の真下を両總用水が、南北方向に流れている。(第2図・付図)

本遺跡周辺の台地上には、縄文時代から平安時代にいたる数多くの遺跡が存在する。特に、縄文時代の遺跡が多く、慶応義塾大学の清水潤三教授が調査研究された山武姥山貝塚は著名である。第1図に図示した遺跡は以下の通りである。

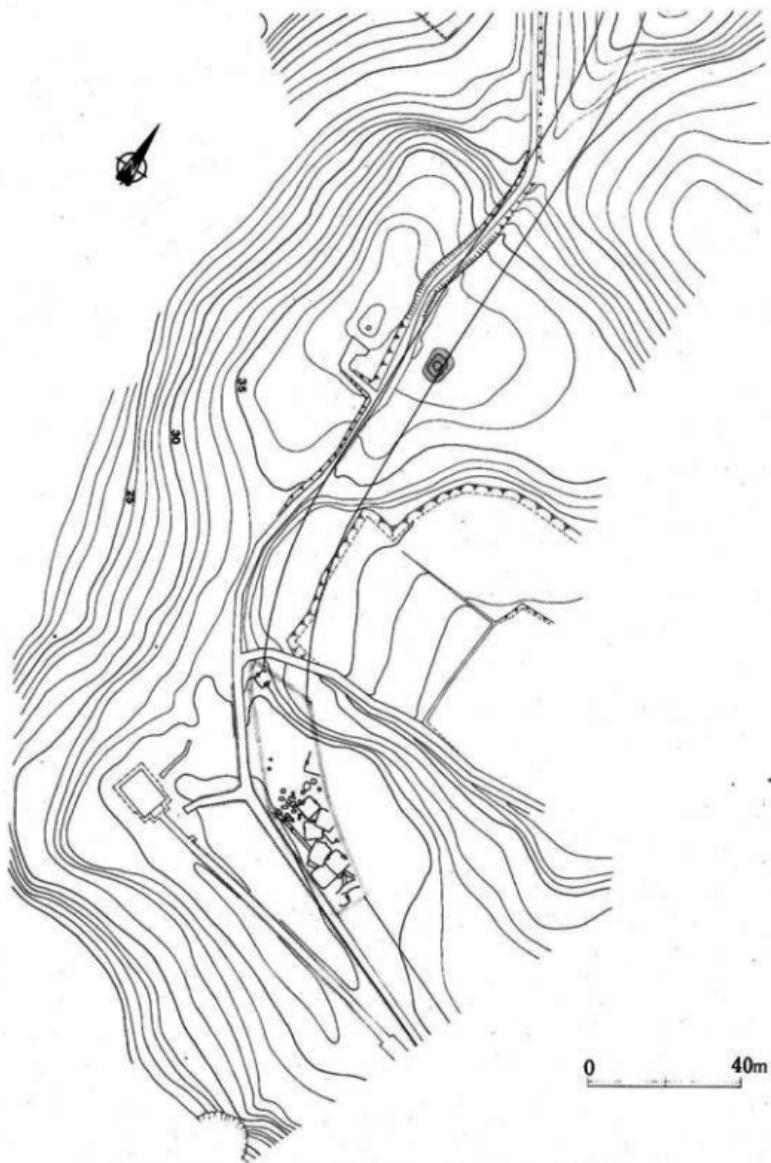
(中西克也)

遺跡名	時期	報告書・参考文献	
1. 長倉宮脇遺跡			
2. 荒久台遺跡	鬼高	伊藤一男「荒久台遺跡」(1981)	
3. 無木台I遺跡	貝塚		
4. 山武姥山貝塚	貝塚	清水潤三「姥山貝塚」『日本考古学年報』12(1956)	
5. 横芝VI遺跡	散布地		
6. 横芝IV遺跡	散布地		
7. 横芝V遺跡	散布地		
8. 横芝III遺跡	散布地		
9. 東長山野I遺跡		山武考古学研究所「東京電力送電鉄塔建設事業地内発	
10. 東長山野II遺跡	縄文	同上	掘調査報告」(1983)
11. 東長山野III遺跡	縄文・国分	同上	
12. 中洞遺跡	縄文	同上	
13. 振子上遺跡	和泉・鬼高	同上	
14. 取立古墳群	古墳		
15. 町原古墳群	古墳		
16. 角田鴻巣貝塚	貝塚	清水潤三「鴻ノ巣貝塚」『日本考古学年報』15(1965)	
17. 木戸台貝塚	貝塚	清水潤三「木戸台貝塚」『日本考古学年報』12(1964)	

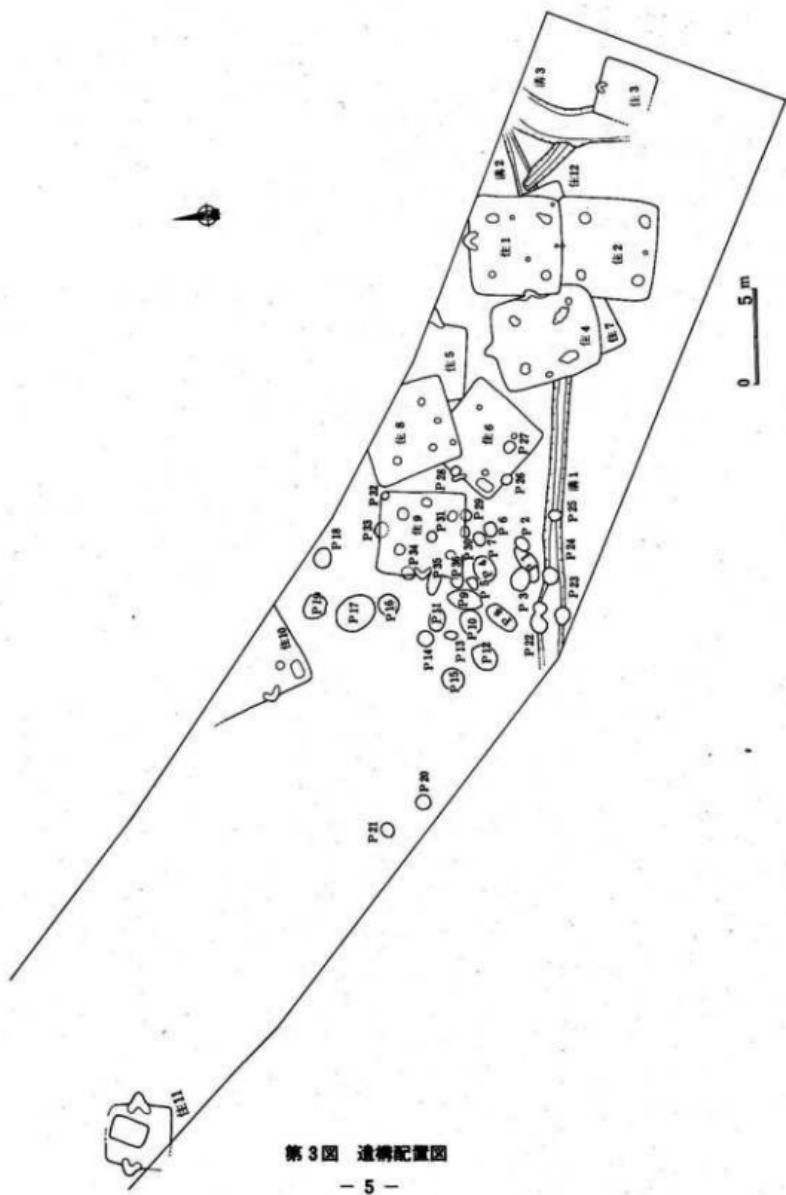


第1図 遺跡の位置

1:25000 多古・成東
昭和56年10月30日発行
国土地理院



第2図 遺跡の位置（スクリーントーン部）と周辺地形図



第3図 遺構配置図

III. 調査経過

本遺跡の発掘調査は、昭和59年6月4日～7月16日まで実施した。調査対象は、道跡工事の区域内に位置する「塚」一基と、確認調査により住居址の存在が知られていた台地上の約720m²である。調査地は、「塚」周辺は雜木林・杉林で、谷を隔てた南側の台地上は杉林であったが、調査開始時には、町役場により伐採を終了していた。集落址と考えられる台地上の遺跡は、確認調査により地表面から遺構確認面までが深いこと、木の切り株が多いことなどから、重機により調査区全域の表土を排除することとした。

調査は、「塚」の発掘を先行し、その間に集落址の表土剥ぎを行ない、「塚」が終了したい集落址の調査を開始するという順で進めた。以下調査日誌を中心に、経過を述べてみたい。

6月4日 本日より調査開始。「塚」の墳丘測量を行ない、発掘区を設定する。東西・南北に十字にセクションベルトを残し、盛土を取り除くことにする。

6月5日 「塚」の発掘を開始する。北東区と南西区を掘り下げる。

6月7日 「塚」北東区の墳頂直下の旧表土面上より、遺物出土。遺物出土状態図を作成し、写真撮影後遺物を取り上げる。土層断面図の東西ラインも作成する。

6月8日 「塚」南西区の墳頂直下の旧表土面上より、素焼きの皿2点出土。昨日出土した遺物といっしょに埋納されたものと考えられた。土層断面図の南北ラインを実測し、北西・南東区の掘り下げを開始する。本日より台地上の集落址の重機による表土削平作業を開始する。

6月9日 「塚」のそれぞれの発掘区を地山面まで掘り下げる。墳頂部付近のセクションベルトを取りはずし、「塚」の調査を終了する。集落址の表土削平作業を終了する。

6月11～16日 台地上の集落址の遺構確認作業を行なう。南側より順に住居址番号を付ける。約10軒の住居址の他ピット群、溝が検出された。遺跡の層序は、第I層（表土、黒色土層）が約15～20cm、第II層（茶褐色土層）が10～20cmで、以下はソフトローム層である。遺構は、第II層の下部で確認することができたが、プランが不明瞭なものはソフトローム上面まで削平した。遺構確認にあたって、多くの土器片が出土したが、土師器・須恵器片が主体を占め、各住居址およびピット群に関連するものと考えられた。他には繩文土器の細片が数片出土している。

6月18日～7月9日 第1号住居址から順に発掘を開始する。遺構の発掘は、7月9日をもって終了する。調査の結果、住居址12軒（古墳時代、奈良・平安時代）、ピット群（平安時代）溝状遺構が検出された。

7月10日～16日 調査員のみ2名にて、各住居址のカマドの切開、実測図の作成を行なう。7月14日に遺跡の全体測量を行ない、16日遺跡の発掘終了確認を行ない、すべての調査を完了する。

（村山好文）

IV. 検出した遺構・遺物

1. 住居址

第1号住居址（第4図）

本住居址は、第2・4・12号住居址・第1号溝と重複して検出された。平面形は方形を呈し、規模は、 $510\text{cm} \times 460\text{cm}$ を測る。主軸方向は、北を示している。北壁・東壁と西壁の一部は、垂直にしっかりと立ち上がる。他の壁は、各住居址に破壊されている。床面は、ロームを床とし非常に堅緻であり、壁周辺部は貼床が施されている。周溝は、全周している。ピットは、P₁～P₅まで5個検出された。P₁～P₄は主柱穴で、P₅は支柱穴で、深さ14cmを測る。カマドは、北壁中央に位置する。良質な粘土で構築され、右袖・左袖共に残存している。火床部は、非常によく焼け、両袖内側・煙道部はやや焼けている。

本住居址の新旧関係は、第2・12号住居址を切っており、第4号住居址・第1号溝に切られており、第2・12号住居址より新しく、第4号住居址より古い時期の住居址である。

出土遺物（第5図）

1. 杯形土器 第12号住居址のP₁の脇より出土。床面より8cm浮いた状態である。 $\frac{1}{4}$ を現存し、復原実測による。推定口径14cm、底径9.4cm、器高3.2cmを測る。平坦な底部よりゆるやかに立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部内外とも横ナデを施し、体部・底部外面は、ヘラ削りが施され、内面は、ヘラナデの後に一部ヘラミガキによって調整されている。胎土は細砂粒を密に含み、焼成は良好、色調は内外面共に明褐色を呈している。

2. 杯形土器 住居址中央やや南寄りの床面上10cmより出土。 $\frac{1}{4}$ を現存し、復原実測による。推定口径16.6cm、推定底径10.4cm、器高5.3cmを測る。平坦な底部よりやや内傾気味に立ち上がり。口辺部は内外面共に横ナデが施され、体部・底部の外面は、ヘラ削りが施され、内面はヘラナデの後に一部ヘラミガキされている。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面共に明褐色をなしている。

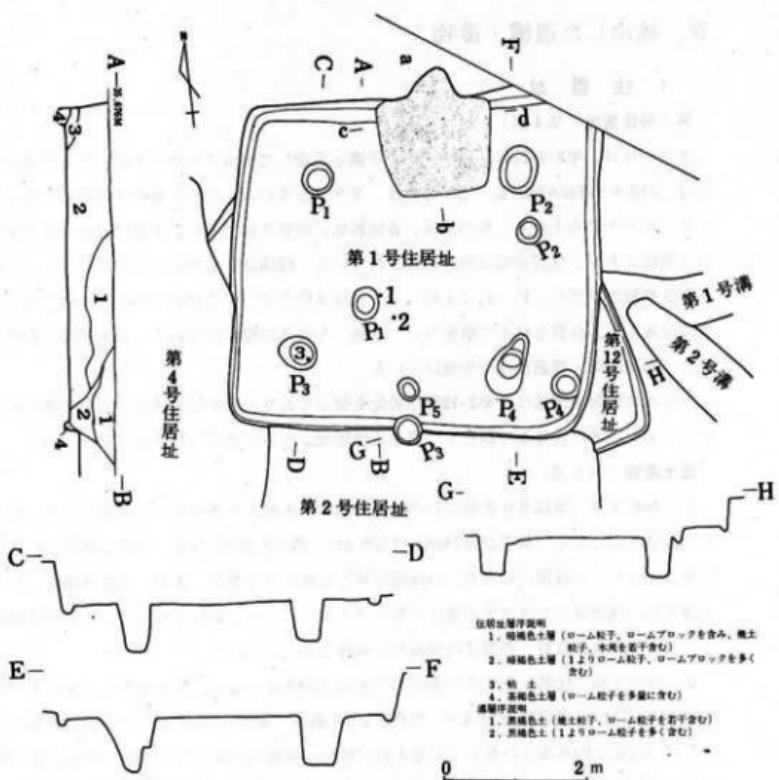
3. 純鍾車 P₃の上より出土。床面上より5cm浮いた状態で出土。滑石製であり、第4号住居址出土遺物16と接合。 $\frac{1}{4}$ を欠損している。

4. 鉄製品 覆土中より出土。U字形をなし、先端部の片方を欠損するが、共に先端部は、屈曲しているものと思われる。断面は長方形を呈している。現存長9.1cm、幅0.8cmを測る。

本住居址は、住居址の形態・規模及び出土遺物より、真間期と思われる。

第2号住居址（第6図）

本住居址は、第1・4・7・12号住居址・第1号溝と重複して検出された。平面形は方形を呈し、規模は、 $498\text{cm} \times 530\text{cm}$ を測る。主軸方向は、北を示している。北壁と西壁の一部は、第1号住居址と第4号住居址によって破壊されているが、他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、保存状態



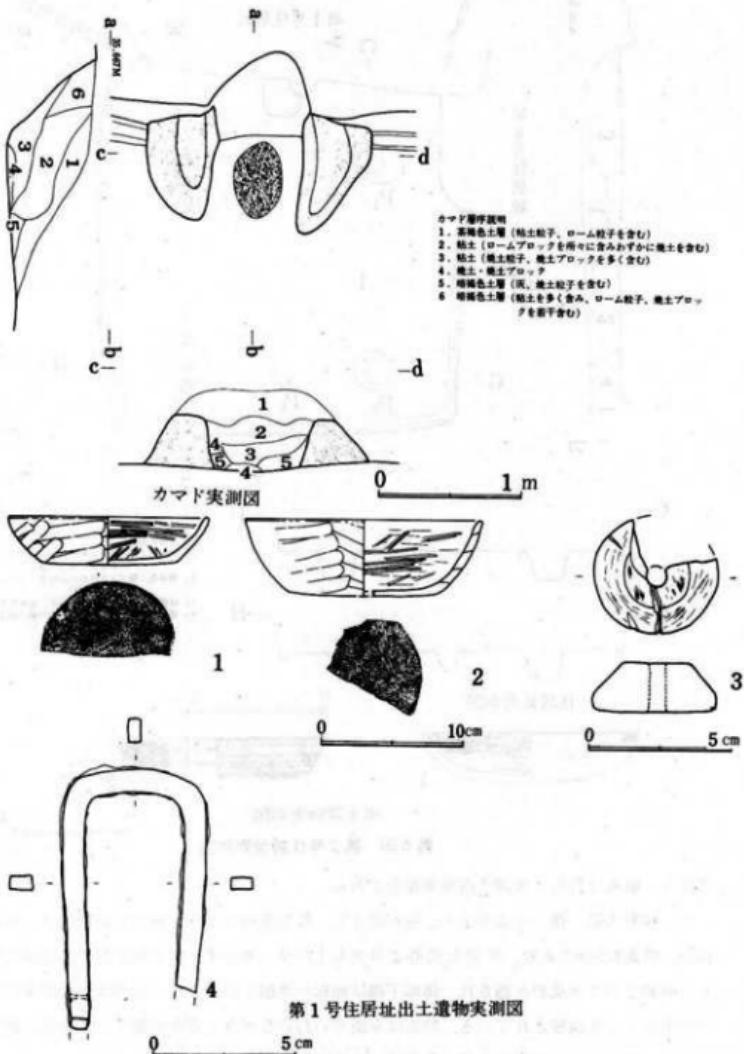
第4図 第1・12号住居址実測図(1)

は非常に良い。床面は、貼床であり、中央部は堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。周溝は全周していると思われる。ピットは、P₁～P₅まで5個検出された。P₁～P₄は主柱穴で、P₅は支柱穴である。カマドは、北壁中央にあったと考えられるが、第1号住居址に完全にこわされ、粘土と火床部の一部のみ残存していた。

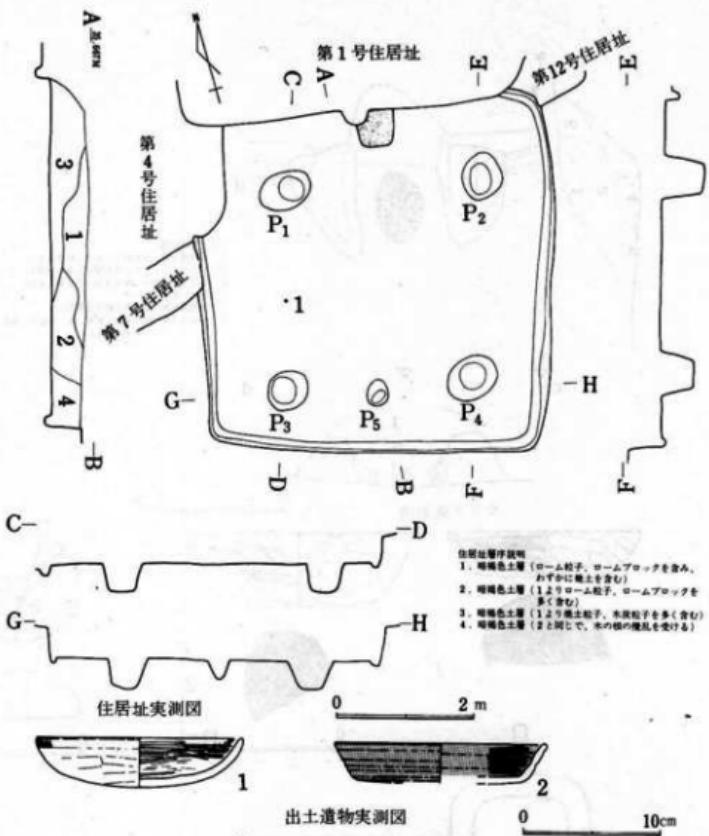
本住居址は、第1・4号住居址に切られ、第7・12号住居址を切っている。

出土遺物（第6図）

1. 杯形土器 P₁とP₃の間の床面直上より出土。完形である。口径15cm、器高3.6cmを測る。口辺部下に非常に弱い外縁を有する。口辺部外面は横ナデが見られ、体部外面は、ヘラ削りが施されるが、ほとんど摩耗している。内面全面にヘラミガキされている。胎土は、細砂粒を密



第5図 第1・12号住居址実測図(2)



第6図 第2号住居址実測図

に含み、焼成は良好、色調は内面黒褐色である。

2. 杯形土器 覆土中より出土。尧が現存し、復原実測による。推定口径15.4cm、推定底径12cm、器高2.9cmである。平坦な底部より立ち上がり、まっすぐ口辺部に至る。体部内外面とも、明瞭なロクロ成形が施され、体部下端は回転ヘラ削りが見られ、底部はヘラ削りの後にヘラナデによって調整されている。内面は全面ていねいなヘラミガキが施されている。胎土は、細砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は、内外面共に赤色塗彩が施されている。

本住居址は、他の住居址との重複関係、住居址の形態、規模及び出土遺物より、真間期と考

えられる。

第3号住居址（第7図）

本住居址は、調査区域の東端において、第3号溝と重複して検出された。住居址の南西隅は確認調査のグリッドによって消失しているが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は300cm×270cmを測る。住居址の主軸方向は、北東を示している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ローム直床で、周辺部は貼床であり、全体的に軟弱である。床面は、平坦である。周溝は、全周している。ピットは、検出できなかった。カマドは、北壁中央に位置している。カマドの両袖の基部は、ロームを掘り残し、前方に粘土を貼り付けている。粘土は、あまり良質でない。火床部は、ほとんど焼けていない。

本住居址は、第3号溝に切られている。

出土遺物（第7図）

本住居址の大部分が、確認調査のグリッドによって破壊されているため、出土遺物は極めて少ない。

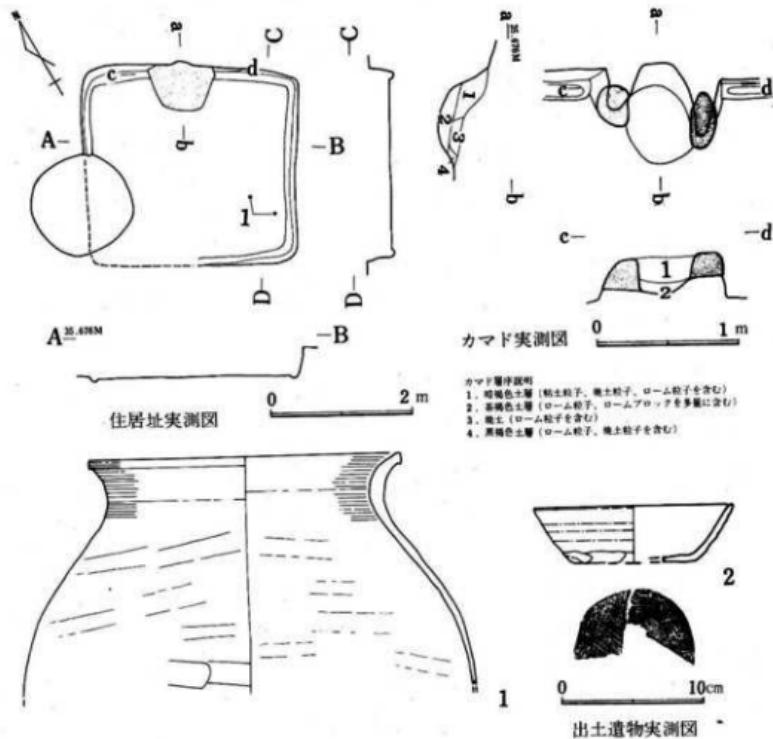
1. 装形土器 住居址南東隅の床面上8~10cmより出土。口径は、22cmを測る。頸部でゆるやかに外反し、口唇部に直立する面をもつ。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は良好。色調は、内外とも赤褐色である。

2. 杯形土器・覆土中より出土。 $\frac{1}{3}$ を現存する。体部は、底部から比較的緩やかに内窓して立ち上がり、ほぼ直線的に開く。体部内外面ともロクロ痕を有し、体部下端はヘラ削りが施される。底部は、静止糸切りの後に周縁を手持ちヘラ削りによって調整される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、内外面とも褐色を呈する。

本住居址は、住居址の形態・規模及び出土遺物より、国分期と考えられる。

第4号住居址（第8、9図）

本住居址は、第1・2・7号住居址と第1号溝と重複して検出された。平面形は、短辺が若干膨張りの長方形を呈し、長辺562cm、短辺462cmを測る。住居址の主軸方向は、東を示している。南東コーナーの壁は、第1号溝と第2号住居址によって破壊されているが、他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、保存状態は、非常に良好である。西壁の一部は、火を受け、焼けている面がある。床面は、貼床で非常に堅緻であり、南壁中央部付近に若干凹凸があるが、全体的に平坦である。ピットは、P₁~P₂₀まで20本検出された。P₁~P₄は主柱穴で、P₅は支柱穴である。P₄~P₂₀の7本は、壁柱穴であり、床面からの深さは、P₄~20cm、P₅~17cm、P₆~6cm、P₇~6cm、P₈~5cm、P₉~28cmを測る。P₁₁~P₁₂、P₁₃の深さは、それぞれ55cm、32cm、55cmである。P₆~P₁₀は、北壁にある旧カマドに伴なう柱穴である。カマドは、北壁中央に旧カマドの痕跡を残す。



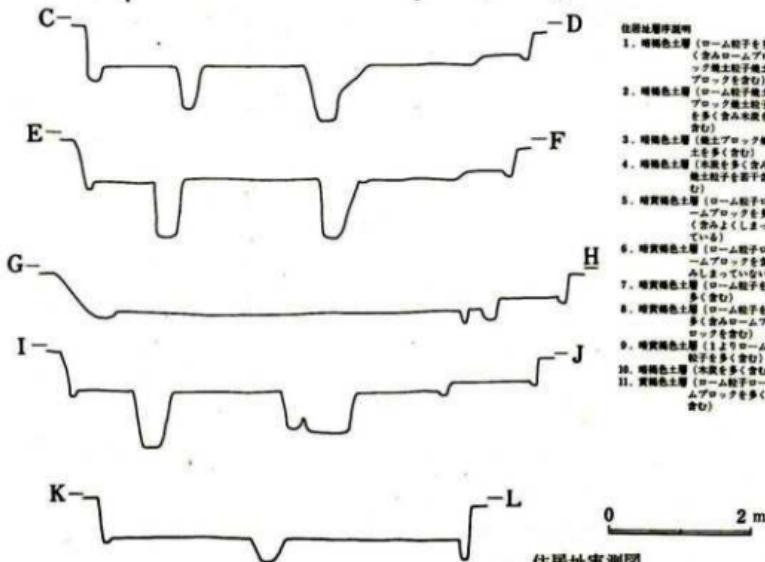
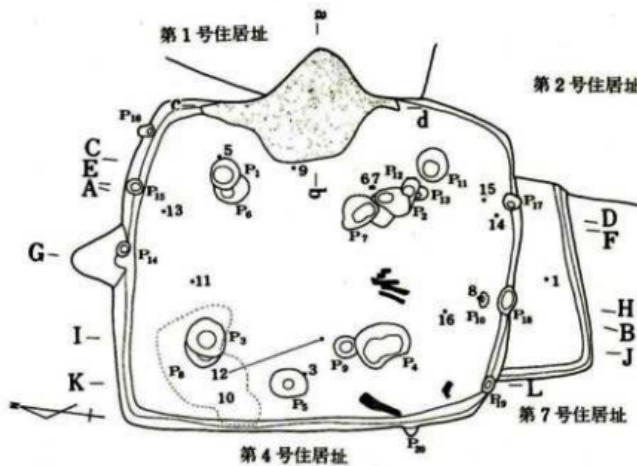
第7図 第3号住居址実測図

東壁中央に新カマドを設けている。新カマドは、第1号住居址の覆土中につくっているため、良質の粘土を多量に使用しており、特に、左袖は、壁にレンガ状に貼り付けてある。また、煙道部にも粘土を貼り付けてある。周溝は、南壁と東壁下の一部を除いて全周している。

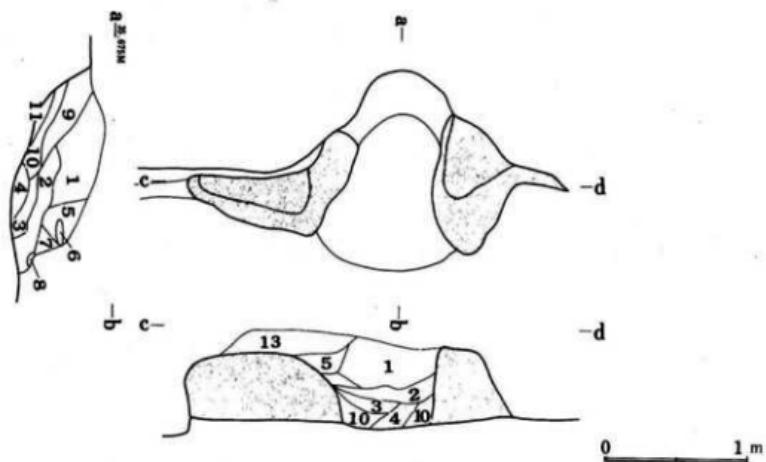
本住居址は、長方形を呈する平面形、旧カマドと新カマドを有する事、及び、2～4個の重なる柱穴を有する事より、拡張された住居址と考えられる。また、床面がよく焼けており、床面上に多量の焼土と炭化材が検出され、壁の一部に火を受け焼けた面を残しており、焼失住居址である。本住居址が廃絶された直後に、焼土・炭化材・カマド構築材と思われるレンガ状の焼土ブロックが多量に投げ捨てられたような土層堆積が見られる。

本住居址は、重複するすべての住居址を切っており、第1号溝によって切られている。

出土遺物（第11～13図）



第8図 第4・7号住居址実測図(1)



第4号住居址カマド実測図

- カマド解説圖
1. 噴褐色土層 (粘土を多く含み鐵土粒子を含む)
 2. 黑褐色土層 (河川土含み砂利や鐵土粒子、鐵土ブロック、粘土を含む)
 3. 黑褐色土層 (粘土を含み灰岩を若干含む)
 4. 噴褐色土層 (粘土粒子、粘土を含みしまりがない)
 5. 噴褐色土層 (1と同じだが粘土が少ない)
 6. カマド焼成材
 7. 噴褐色土層 (1と同じだが灰を多く含む)
 8. 木炭
 9. 噴褐色土層 (粘土、粘土を多く含む)
 10. 噴褐色土層 (粘土、ローム粒子を多く含み鐵土を若干含む)
 11. 噴褐色土層 (粘土、ローム粒子を含む)
 12. 噴褐色土層 (1と同じだが鐵土が多い)
 13. 噴褐色土層 (ロームを含み鐵土を若干含む)

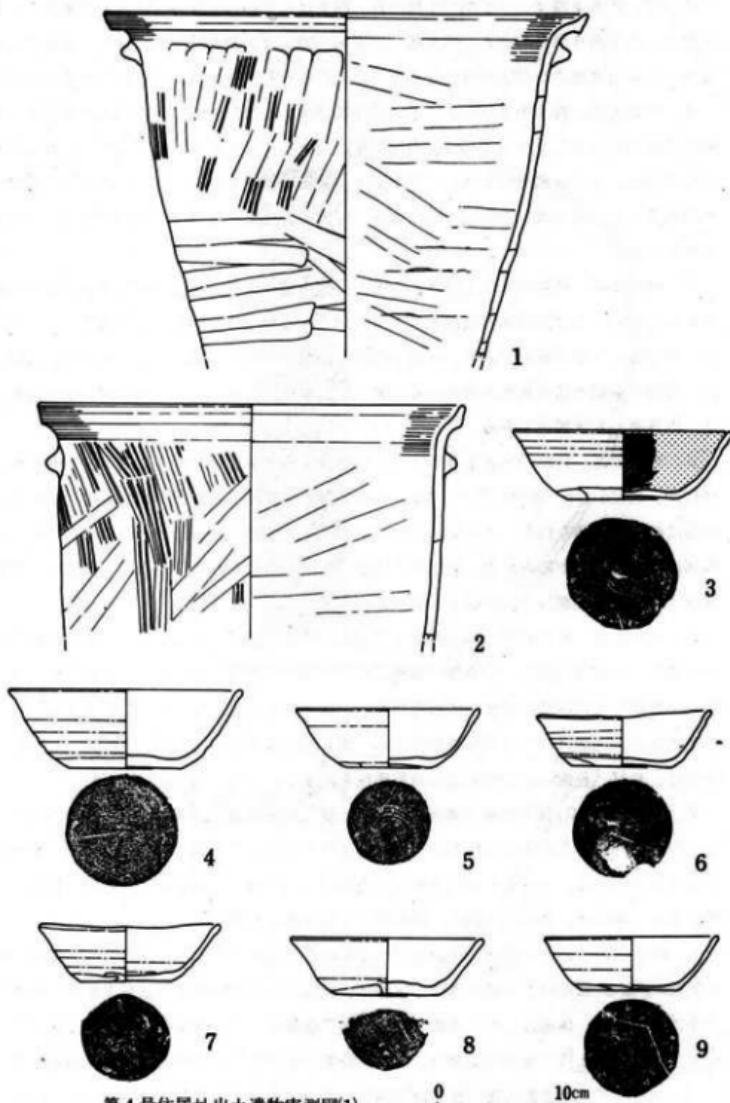
第9図 第4・7号住居址実測図(2)

本住居址より出土した遺物は、多量にあり、そのほとんどが土器である。遺物は住居址全面より出土するが、住居址中央部は、若干出土が少ない。

1. 濱形土器 カマドより出土。口径の約半分が現存する。頭部より強く屈曲する口縁部は、外面に直立する面をもち、内面に稜を有する。胴部は、張りを持たず直線的に中位に至る。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面はヘラナデが施され、外面上部は、タタキ目の後にヘラナデされており、下部は、横方向のヘラ削りが施される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好、色調は、内外面とも褐色を呈する。推定口径は、33.6cmを測る。胴部内面に輪積み痕を有する。

2. 濱形土器 カマドより出土。口径の約半分を現存し、口径は、26cmである。頭部より屈曲する口縁部は、外面に直立する面をもち、内面に稜を有する。口縁部は、内外面とも横ナデが施され、胴部内面は、ヘラナデされ、外面は、タタキ目の後にヘラナデによって調整されている。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、赤褐色を呈する。

3. 杯形土器 P₃脇の床面上2cmより出土。完形で、口径15cm、底径7.7cm、器高4.8cmを測る。体部は、中央やや器厚の薄い底部から内弯して立ち上がり、口縁部が若干外反する。ロク



第4号住居址出土遺物実測図(1)

第10図 第4・7号住居址実測図(3)

口成形で、体部下端は、ヘラ削りが施され、内面は、ていねいなヘラミガキが施されている。底部は、ヘラ削り調整のため、切り離しは不明。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は良好。内面は、一見暗文風のヘラミガキによる黒色の光沢をもち、外面は、黒灰褐色を呈する。

4. 杯形土器 覆土中より出土。推定口径16.2cm、底径7.8cm、器高5.4cmを測る。やや厚い器厚の底部から立ち上がる体部は、内弯気味に開き、上半でわずかに外反して口縁部に至る。体部外面は、ロクロ成形痕を残し、下端部は、回転ヘラ削りが施される。底部は、回転ヘラ削り調整である。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、内面黒色で、外面は黒褐色を呈する。

5. 杯形土器 P₁脇の床面上27cmより出土。 $\frac{1}{2}$ を現存する。推定口径12.8cm、底径5.8cm、器高4.1cmを測る。上げ底気味の底部より立ち上がる体部は、器厚が薄く、上半でわずかに外反する。体部は、ロクロ成形であり、外面下端部に回転ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切り後、周縁を回転糸切り調整されている。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、やや良好。色調は、内外面とも黄褐色である。

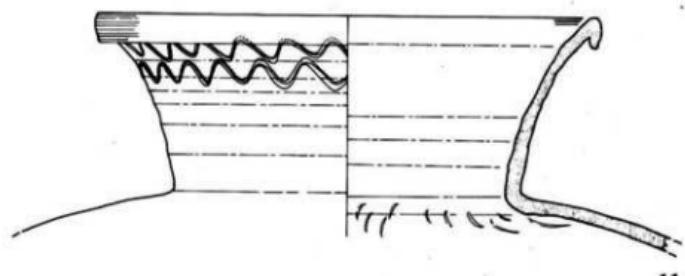
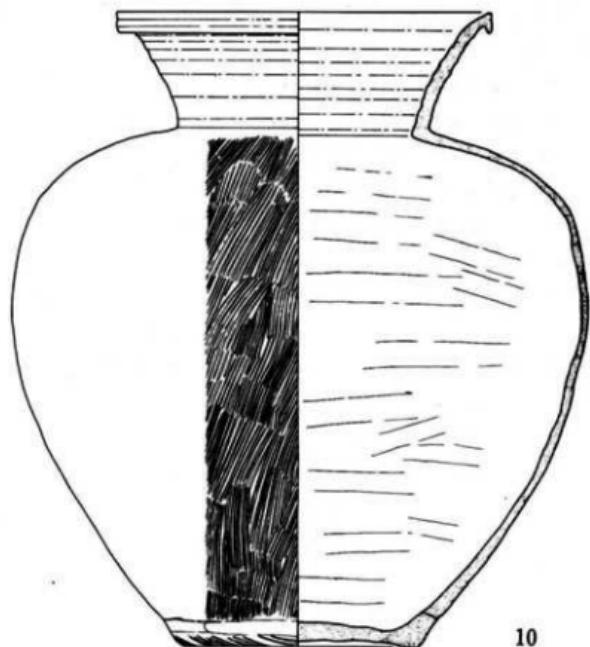
6. 杯形土器 P₂脇の床面上3cmより7の杯形土器と重なった状態で出土。完形である。口径12cm、底径6.8cm、器高3.7cmを測る。一定の器厚の底部から若干内弯して立ち上がる体部は、外面に細かい凹凸を持ち、上半でわずかに外反する。体部内外面は、ロクロ成形され、外部下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転ヘラ削り調整である。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、内外面とも暗黄褐色を呈する。

7. 杯形土器 6の杯形土器と重なって出土。完形である。口径12.4cm、底径6.4cm、器高4cmを測る。平坦な底部からやや強く屈曲して立ち上がる体部は、直線的にひろがり、上半でわずかに外反して口縁部に至る。体部内外面に、ロクロ成形痕が見られ、外部下端は、ヘラ削りが施される。底部は、ヘラ削り調整のため、切り離しは不明。胎土は、細砂粒・金雲母を含み、焼成は、良好。色調は、内外面とも暗黄褐色を呈する。

8. 杯形土器 P₁₀脇の床面上30cmより出土。推定口径13.2cm、推定底径6.8cm、器高4cmを測る。厚い底部から立ち上がる体部は、直線的にひろがり、口縁部に至る。体部は、ロクロ成形で、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、ヘラ削りで調整されている。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内外面とも明黄褐色を呈する。

9. 杯形土器 カマド正面の床面上13cmより出土。完形である。口径12.2cm、底径6.8cm、器高3.8cmを測る。器厚は、非常に薄い。体部は、底部から若干内弯して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。体部は、ロクロ成形で、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、ヘラ削りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、内面暗黄褐色、外面赤褐色である。

10. 变形土器 須恵器大甕。住居址北西コーナー付近の床面上5~15cmより、一時期に廃棄された状態で出土。口縁部と胴部の一部を欠損する。推定口径26.2cm、底径16.8cm、器高44.2



第4号住居址出土遺物実測図(2)

0 10cm

第11図 第4・7号住居址実測図(4)

cmを測る。最大径は、胸部やや上位にあり、40.5cmを測る。上げ底気味の底部から強く内窵して立ち上がる胸部は、内面に明瞭な凹凸を見せながら内窓気味に開く。肩部は、比較的広く張っている。頸部は、肩部から「く」の字形に強く屈曲し、やや外反しながら、口縁部に到る。口縁部は、外面に凹線を有する直立する面をもち、内面にわずかな稜を有する。口縁部は、内外面とも横ナデが行なわれ、頸部は、明瞭なロクロ成形痕を外面に残し、胸部外面は、細いタタキ目を全面に施し、内面は、ヘラナデが施される。胎土は、粗砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、暗灰色。肩部外面と口辺部内面・底部内面に淡緑色の自然釉がかかっている。

11. 美形土器 須恵器大甕。P₃の東側の床面上30~40cmより出土。推定口径35cmを測る。肩部から強く屈曲する頸部は、内外面に凹凸を持ち、外反する。口縁部は、下方にのび直立する面を持つ。口縁部内外面とも横ナデが見られ、頸部は、明瞭なロクロ成形痕を有し、外面に2本の波状沈線が描かれている。体部は、ヘラナデが施され、内面には三日月形のヘラ削りが残る。胎土は、細砂粒を密に含み、粗石粒・小石を若干含み、焼成は良好。色調は、内面灰色、体部外面は白灰色、頸部黒灰色を呈する。

12. 美形土器 須恵器大甕。住居址北西コーナー付近より出土した土器とP₉の北側及びピット群のP₅より出土した土器の接合土器で、それぞれ床面上5~15cmと8cm浮いた状態で出土。胸部の一部を欠くが、完形である。口径41.3cm、底径23.4cm、器高65cmを測る。最大径は、胸部上位にあり、59.5cmを測る。上げ底の底部から強く屈曲して立ち上がる胸部は、内窓気味にひろがり、肩部に至る。肩部は、比較的広く張っている。頸部は、肩部から「く」の字形に強く屈曲し、外反しながらひろがる。口縁部は、直立し凹面をつくり、端部は尖り気味である。口縁部は、横ナデが施され、頸部は、ロクロ成形で、外面にロクロ成形痕を有する。胸部は、やや幅の広いタタキ目を全面に施し、胸部内面上半は、ヘラナデの後に同心円の浅いタタキにより叩きしめられ、下半はていねいなヘラナデが施される。胎土は、粗砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、内面青灰色、外面白灰色であるが、外面全面と内面頸部は、黒く塗っており胸部内面に、塗料のはねた痕が見られる。

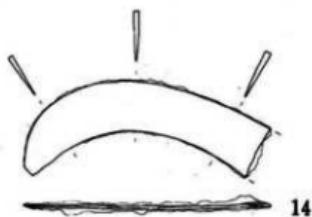
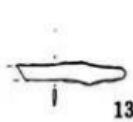
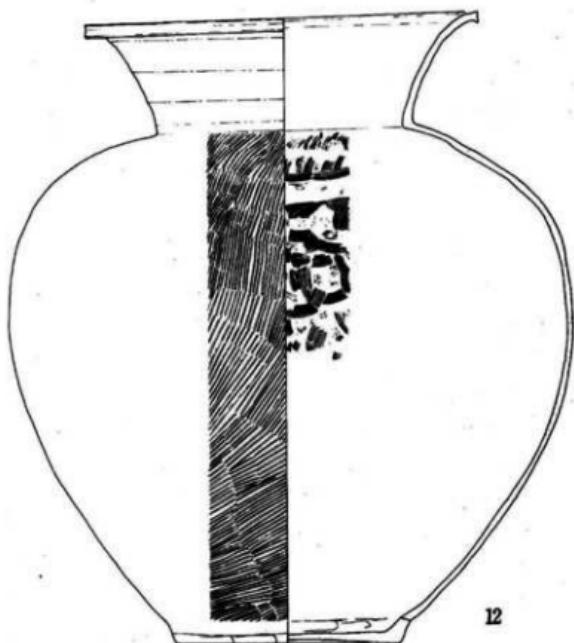
13. 刀子 北壁下の床面直上より出土。身の一部を現存する。現存長5.7cm、幅0.8cmを測る。

14. 鎌 南壁下の床面上10cmより出土。基端部を欠損する。現存長13cm、幅2.6cmを測る。

15. 紡錘車 南壁下の床面上10cmより出土。紡輪の一部と芯棒の両端を欠損する。現存長13.5cm、軸径0.4cm、紡輪径7cmを測る。

16. 紡錘車 滑石。P₄の南東の床面上21cmより出土。第1号住居址の3と接合する。

本住居址は、他の住居址の切り合い関係、住居址の形態・規模及び出土遺物より、国分期と考えられる。



第4号住居址出土遺物実測図(3)

第12図 第4・7号住居址実測図(5)

第5号住居址（第13図）

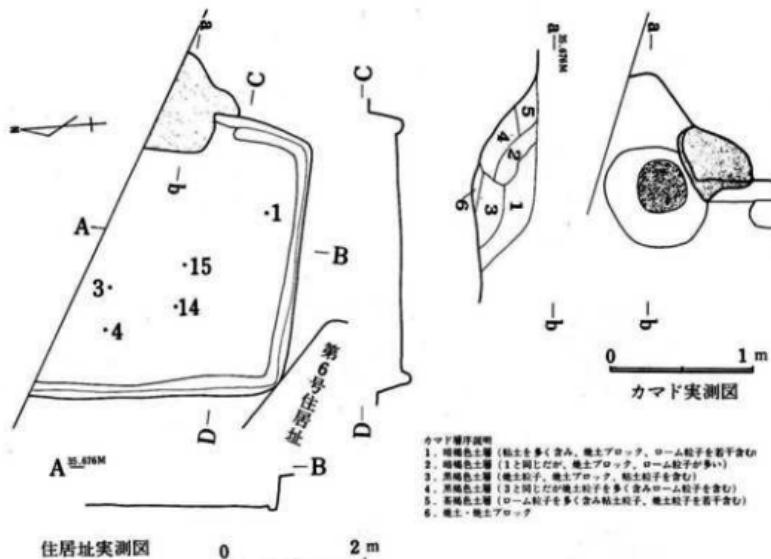
本住居址は、第8号住居址を切り、第6号住居址とわずかに接して検出された。住居址の多くは、調査区域外にあるため、調査できなかった。平面形は、方形を呈し、東西辺396cmを測る。住居址の主軸方向は、東を示している。壁は、ほぼ垂直にしっかりと立ち上がる。床面は、ロームを床としやや堅緻であり、壁近く及び第8号住居址と重複する部分は、貼床が施されている。ピットは、検出できなかった。周溝は、カマド付近を除いて全周している。カマドは、東壁中央に位置する。床面を若干掘り込んでいる。天井部は崩落している。右袖は、基部のみ残存している。火床部は、非常によく焼けている。覆土は、4層に分けられ、第1層ローム粒子を若干含む黒褐色土、第2層ローム粒子を含み、焼土粒子を若干含む暗褐色土、第3層ローム粒子をやや多く含む暗褐色土、第4層ローム粒子を多く含む暗黄褐色土である。

出土遺物（第14図）

1. 装形土器 南壁下の床面上0~12cmより出土。多くを現存し、推定口径22cmを測る。頭部より強く外反する口縁部は、凹面を有する直立する面をなし、内面に若干の稜を有する。口縁部内外面は、横ナデが見られ、胴部外面は、縱方向のヘラ削り、内面は、ヘラナデが施される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、赤褐色を呈する。外面に輪積み痕を有する。
2. 装形土器 カマド内より出土。多くを現存し、推定口径17.8cmを測る。頭部より外反する口縁部は、外面に直立する面を持ち、内面に稜を有する。胴部は、ゆるやかに張る。口縁部内外面は、横ナデが施され、胴部外面は、縱方向のヘラ削り、内面は、ヘラナデが施される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、暗黄褐色を呈する。
3. 杯形土器 住居址中央の床面直上より出土。推定口径14.6cm、底径6.6cm、器高4cmを測る。体部は、底部からゆるやかに内窵して立ち上がり、口縁部に至る。体部は、ロクロ成形であり、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、黄褐色。
4. 杯形土器 住居址中央やや西寄りの床面上6cmより出土。完形であり、口径13cm、底径6.5cm、器高3.8cmを測る。底部から内窵して立ち上がる体部は、直線的に外反する。体部の器厚が、若干厚くなっている。体部内外面に、ロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが施され、底部は、回転糸切りの後に周縁を回転ヘラ削りで調整する。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、赤褐色を呈する。

5. 杯形土器 カマド内より出土。推定口径14.8cm、底径7cm、器高4cmを測る。上げ底の底部から内窵して立ち上がる体部は、内外面に凹凸を持ち、直線的に外反する。体部は、ロクロ成形痕を残し、底部は、回転糸切りである。胎土は細砂粒を含み、焼成良好。赤褐色を呈す。

6. 杯形土器 覆土中より出土。推定口径12.6cm、底径6cm、器高5cmを測る。体部は、底部から内窵して立ち上がり、上半において若干外反する。体部は、ロクロ成形であり、底部は回転糸切りである。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、内面赤褐色、外側黒



第13図 第5号住居址実測図(1)

褐色を呈する。

7. 杯形土器 覆土中より出土。推定口径13.6cm、底径6.2cm、器高4.6cmを測る。中央が薄い器厚の底部から強く立ち上がる体部は、内窓気味に開き、口縁部は若干外反し、口唇部は、やや角張っている。体部は、内外面ともロクロ成形痕を明瞭に残し、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、赤褐色を呈する。

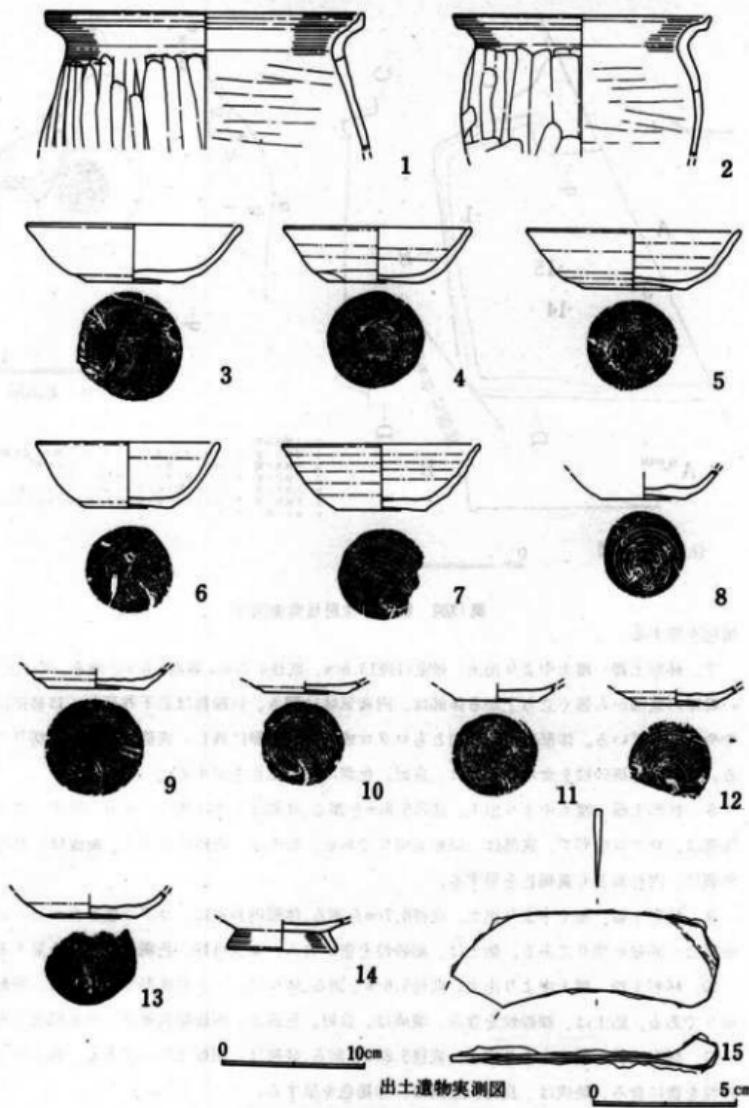
8. 杯形土器 覆土中より出土。底径5.8cmを測る。底部は、上げ底で、中央の器厚が薄い。体部は、ロクロ成形で、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内外面とも黄褐色を呈する。

9. 杯形土器 覆土中より出土。底径6.7cmを測る。体部内外面に、ロクロ成形痕が見られ、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成良好。色調は、褐色を呈する。

10. 杯形土器 覆土中より出土。底径5.6cmを測る。体部は、ロクロ成形で、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内面暗黄褐色、外面褐色である。

11. 杯形土器 覆土中より出土。底径5.8cmを測る。底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、赤褐色を呈する。

12. 杯形土器 覆土中より出土。底径5.6cmを測る。体部は、内外面にロクロ成形痕を残し、



第14图 第5号住居址实测图(2)

底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成良好。色調は、黄褐色を呈する。

13. 杯形土器 覆土中より出土。底径6.4cmを測る。体部は、ロクロ成形であり、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に周縁を回転ヘラ削り調整が施される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内面赤褐色、外面暗赤褐色を呈する。

14. 高台付杯形土器 住居址中央やや西寄りの床面上10cmより出土。底径9.4cmを測る。高台は、短かく、接地面は丸味をおびる。高台は、内外面とも横ナギが施され、体部は、ロクロ成形である。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、黄褐色を呈する。

15. 銚 住居址中央の床面上より出土。現存長9.4cm、幅2.7cmを測る。先端部を欠損する。本住居址は、住居址形態及び出土遺物により、国分期と考えられる。

(中西克也)

第6号住居址（第15図）

本住居址は、第8号住居址に切られ、第5号住居址とはわずかに接して検出された。また、P-26、27、28にも切られている。平面形は、方形を呈し、460cm×466cmを測る。住居址の主軸方向は、北西を示している。北および東壁の一部は、第8号住居址により破壊されているため存在しないが、他の壁は、ほぼ垂直にしっかりと立ち上がる。床面は、ロームを床とし良くしまっており、壁近くは貼床が施されている。ピットは、P₁～P₅まで5個検出された。P₁～P₄は主柱穴で、P₂は第8号住居址の床面において確認した。P₅は貯蔵穴で、隅丸長方形を呈し、深さ32cmを測る。カマドは、北壁中央に位置する。粘土により構築され、右袖・煙道の一部はP-28により破壊されている。焚口、燃焼部はあまり焼けてなく、ほぼ中央に高杯形土器が伏せられて出土している。

本住居址は、確認調査（伊藤1983）において検出された第1号住居址である。確認調査時に住居址の西側 $\frac{1}{4}$ を発掘しており、杯形土器4個体が出土している。

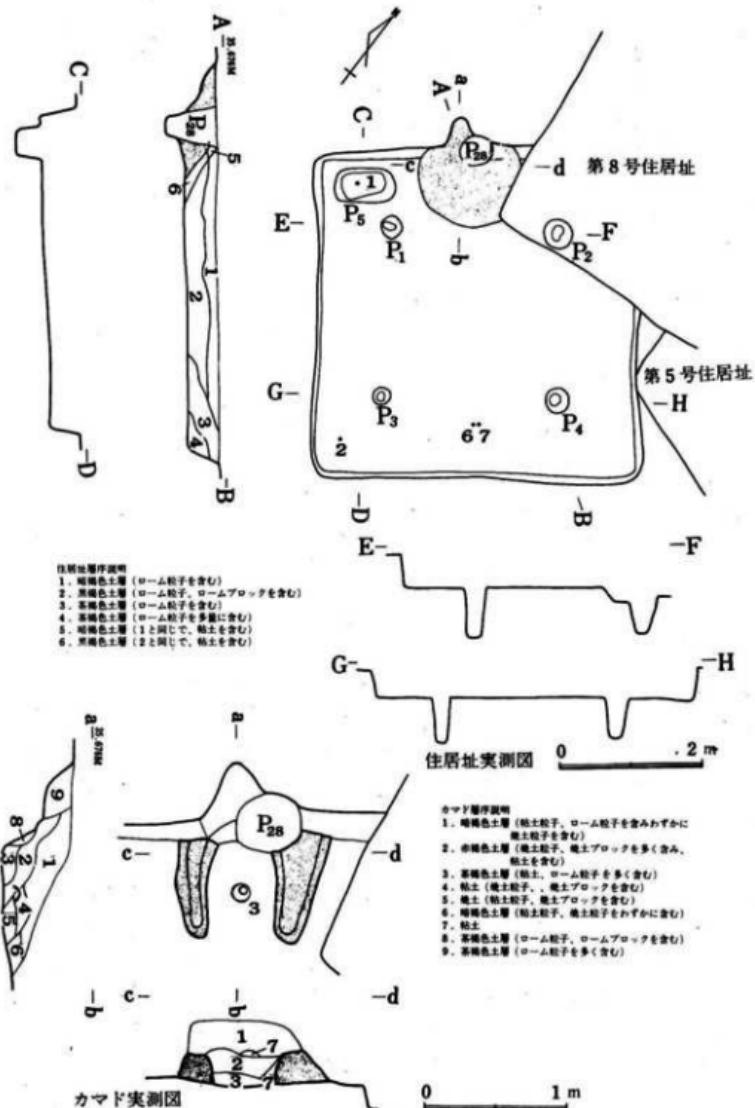
出土遺物（第16図）

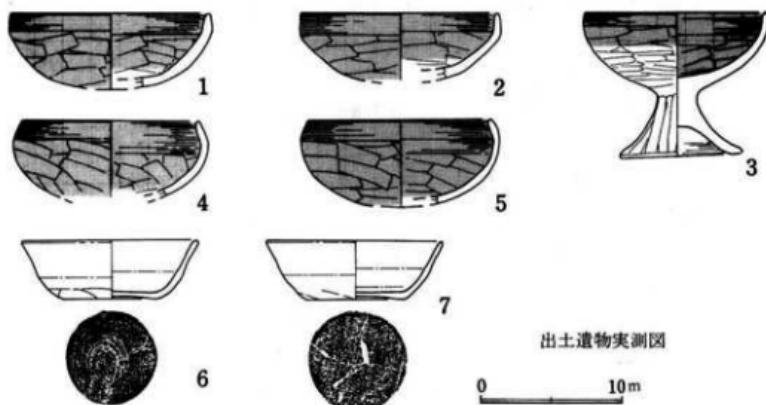
本住居址より出土した遺物は、すべて土師器片である。甕・瓶・杯・高杯形土器が知られるが、図示し得るのは杯および高杯形土器である。1～5は本址に伴うもので、6・7は住居址南側中央の覆土上面から出土したもので、おそらくピット群に伴ったものと考えられる。

1. 杯形土器 P₅の底面より出土。ほぼ完形になるが、2片に割れていて接合しないため復原実測による。口辺部下に弱い外稜を有し、口辺部はやや内傾気味に立ち上がる。口径14cm、現存高5.5cmを測る。外面全面と底部を除く内面に赤色塗彩が施される。

2. 杯形土器 住居址南西隅の床面上2cmより出土。口径の $\frac{1}{4}$ 現存し、復原実測による。外稜を有し、口辺部は直立する。口径14cm（推定）、現存高4.7cmを測る。外面全面と底部を除く内面に赤色塗彩が施される。

3. 高杯形土器 カマド内より口辺部を下にして出土。完形品である。杯部は半球形を呈し





第16図 第6号住居址実測図(2)

脚部は短く「ハ」の字形に開く。口径12.8cm、器高10.1cm、底径8.6cmを測る。杯部内面と口辺部外面に赤色塗彩が施される。

4. 杯形土器 覆土中の出土。口径の約半強現存し、復原実測による。半球形を呈し、口径12.4cm、現存高5.5cmを測る。内外面とも赤色塗彩が施される。

5. 杯形土器 覆土中の出土。口径の約半強現存し、復原実測による。半球形を呈し、口径13cm(推定)、推定器高6.2cmを測る。内外面とも赤色塗彩が施される。

以上の1~5は、いずれも胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面とも茶褐色を呈し、焼成は堅固である。器面の整形・調整も同様の手法がみられる。口辺部は内外面ともヨコナデ、体部は内面ヘラナデ、外面向かにケズリが施される。

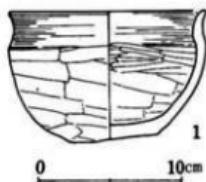
6. 杯形土器 覆土上面より出土。完形品である。口径12.1cm、底径6.5cm、器高4.1cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転ヘラケズリの後、手持ちヘラケズリで調整され、体部下端もヘラケズリが施される。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面とも黄褐色、焼成は良好である。

7. 杯形土器 覆土上面より6といっしょに出土。口径の約半強現存する。口径12.3cm、底径7.9cm、器高4.1cmを測る。ロクロ成形で、体部外面下端と底部は手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒を含み、色調は内面褐色、外面向かに暗褐色を呈し、焼成は良好である。

本住居址は、出土遺物等から古墳時代後期の鬼高期の所産と考えられる。

第7号住居址（第8図）

本住居址は、第2・4号住居址の2軒に切られている。平面形は、方形を呈すと思われるが、住居址の1隅を検出したのみで、詳細は不明である。壁は、南壁および西壁の一部が現存し、



ほぼ垂直でしっかりと立ち上がる。床面はロームを床とし、周溝が掘られている。柱穴およびカマドは、検出されなかった。

出土遺物（第17図）

本住居址より出土した遺物は、すべて土師器片である。ほとんどが細片である。

第17図 第7号住居址出土遺物実測図

1. 小形圓形土器 住居址の現存するほぼ中央の床面より出土。完形品である。口径13.7cm、器高8.9cm、底径6.1cmを測る。胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面とも茶褐色を呈する。焼成は堅固である。器面は、口辺部内外面はヨコナデ、胴部は外面はヘラケズリの後に粗いヘラナデ、内面はヘラミガキ様のヘラナデにより調整されている。底部はヘラケズリにより作り出されている。本住居址は、重複により一部が現存するのみであるが、出土遺物等から古墳時代後期の鬼高期の所産と考えられる。

第8号住居址（第18図）

本住居址は、第6号住居址を切り、第5号住居址に貼られて検出された。すなわち、古い方から第6号住居址→第8号住居址→第5号住居址の順になる。北東隅は、発掘調査区域外である。平面形は、方形を呈し、460cm×470cmを測る。住居址の主軸方向は、ほぼ北を示している。壁は、ほぼ垂直にしっかりと立ち上がるが、南壁および東壁は、他の住居址との重複でわずかに残っている。床面は、ロームを床とした貼床で、中央部はよくしまっている。周溝は、南東隅で切れる他は、全周すると思われる。ピットは、P₁～P₄まで検出された。P₁～P₃は主柱穴で、P₄は、入口施設に伴う柱穴であろう。主柱穴は3個しか検出されなかつたが、区域外に1個あると考えられ、4本柱と考えられる。カマドは、区域外に位置すると考えられ検出されなかつた。

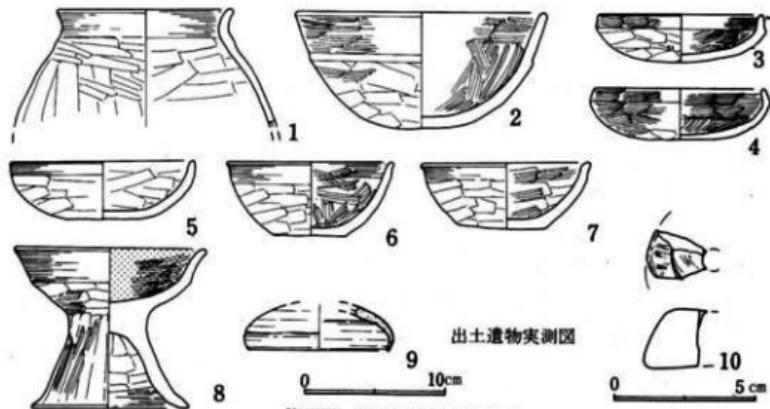
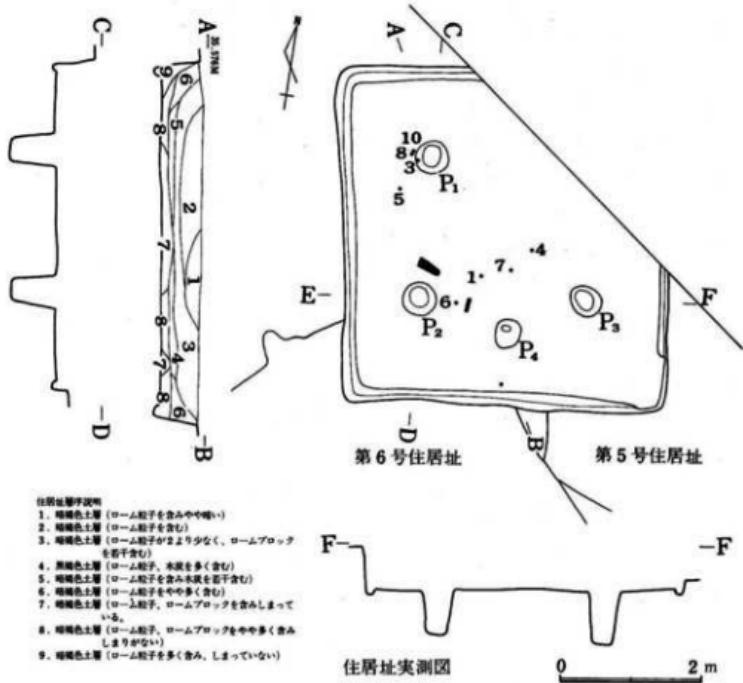
出土遺物（第18図）

本住居址より出土した遺物は、土師器・須恵器・石製品である。

1. 圓形土器 P₂の北東の床面より15cm浮いた状態で出土。口径の約半強現存し、復原実測による。口径12.4cm、現存高8.3cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内外面とも赤褐色、焼成は堅固である。口辺部は、内外面ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデが施される。

2～7は、杯形土器である。3・4は胎土に細砂粒を含むが、精選されており、他は小砂粒を多く含む。焼成はいずれも堅固である。

2. 杯形土器 南壁下の中央、床面より4cm浮いて出土。口径の約半強現存する。口径が大きく、底の深い鉢形に近い形状である。口辺部下に外縁を有する。口径17.8cm、器高8.2cmを測る。



第18圖 第8号住居址実測図

外面は、口辺部ヨコナデ・体部ヘラケズリの後に全体に横方向のヘラミガキが施される。内面はヘラミガキにより調整されている。色調は、内面茶褐色、外面赤褐色を呈する。

3. 杯形土器 P₁わきの床面上より出土。口径の3分の1が現存し、口径11.6cm、器高3.4cmを測る。外縁を有し、口辺部は短かく内傾気味に直立する。内外面とも、ヘラミガキにより調整されるが、外面体部は磨滅している。色調は、内外面とも淡茶褐色を呈する。

4. 杯形土器 住居址中央の床面より35cm浮いた状態で出土。口径の3分の2弱が現存し、復原実測による。外縁を有し、口辺部は内傾する。口径は、12.0cm(推定)、器高は3.7cmを測る。内外面とも入念なヘラミガキが施され、色調は内外面とも淡茶褐色を呈する。

5. 杯形土器 P₁の南西の床面より6cm浮いた状態で出土。口径の3分の2が現存し、復原実測による。素縁口辺を呈し、ヘラケズリにより平底の底部を作り出している。口径13.0cm(推定)、器高4.0cm、底径5.0cmを測る。外面は、口辺部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。色調は、内外面とも茶褐色を呈する。

6. 杯形土器 P₁の東の床面より48cm浮いた状態で出土。口辺部は一部のみ現存し、底部よりの復原実測による。口径11.8cm(推定)、器高5.2cm、底径5.0cmを測る。外面は、口辺部ヨコナデ・体部ヘラケズリの後ヘラナデ、内面は粗いヘラミガキが施される。色調は、内面暗茶褐色、外面茶褐色を呈する。

7. 杯形土器 住居址中央の床面より40cm浮いた状態で出土。口辺部の一部を欠くが完形。口径12.0cm、器高4.7cm、底径6.2cmを測る。外面は、口辺部ヨコナデ・体部ヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラナデの後にヘラミガキにより調整される。色調は、内面赤褐色、外面茶褐色を呈する。

8. 高杯形土器 P₁の西側の床面より2cm浮いた状態で出土。口唇部と裾端部の一部を欠くが完形である。口径13.6cm、器高11.4cm、裾径11.0cmを測る。外面は、口辺部ヨコナデ・杯部体部から脚部はヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施される。内面は、杯部はヘラミガキにより調整され、黒色処理されている。脚部は、端部はヨコナデ、脚柱部はヘラケズリが施される。色調は内外面とも茶褐色を呈する。

9. 須恵器の蓋形土器 覆土より出土。口径の3分の2が現存し、復原実測による。口径10.0cm(推定)、現存高3.2cmを測る。ロクロにより成形され、口辺部と天井部の境に浅い凹線がみられる。胎土は、細砂粒を含むが精選され、色調は内外面灰色を呈し、焼成は非常に良好である。

10. 石製紡錘車 P₁の西の床面より10cm浮いた状態で出土。滑石製の紡錘車の破片である。推定径3.8cm、高さ2.0cm、中心孔の推定径0.8cmを測る。

本住居址は、出土遺物等から古墳時代後期の鬼高峰期の所産と考えられる。

第9号住居址（第19図）

本住居址は、単独で存在するが、ピット群との重複が認められ、P-29~36に切られている。平面形は、方形を呈し、440cm×440cmを測る。住居址の主軸方向は、西北西を示している。壁は4壁とも、ほぼ垂直にしっかりと立ち上がる。床面は、ロームを床とする貼床で、中央部は非常によくしまっている。周溝は、全周する。ピットは、P₁~P₅まで5個検出された。P₁~P₄は主柱穴である。P₅は深さ36cmを測り、入口施設に伴う柱穴と考えられる。カマドは、西壁中央に検出された。粘土により構築されている。燃焼部は掘りくぼめられているが、底面は焚口付近が焼けていたのみである。煙道は、住居址外へ25cm程度伸びている。

出土遺物（第20図）

本住居址より出土した遺物は、土師器、耳環である。他に住居址南西隅より粘土が検出されている。

1. 小形夔形土器 カマド西の床面より5cm浮いた状態で出土している。口辺部は現存し、胴部は一部現存、底部は全周し、復原実測による。口径11.0cm(推定)、器高8.6cm、底径7.5cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内外面とも暗茶褐色、焼成は堅固である。外面は、口辺部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ、内面は口辺部ヨコナデ、胴部はヘラナデにより器面調整される。

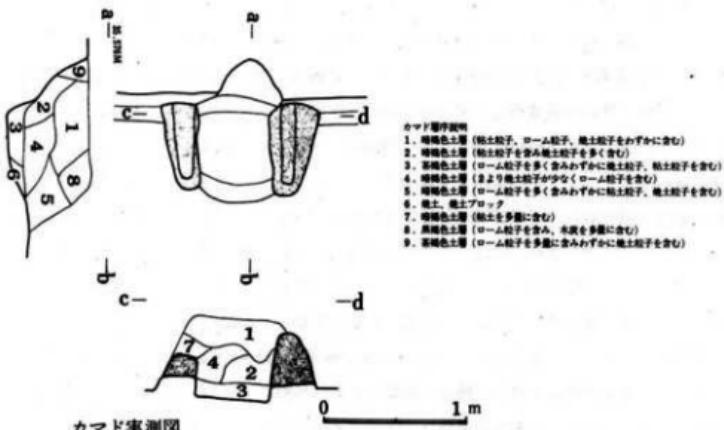
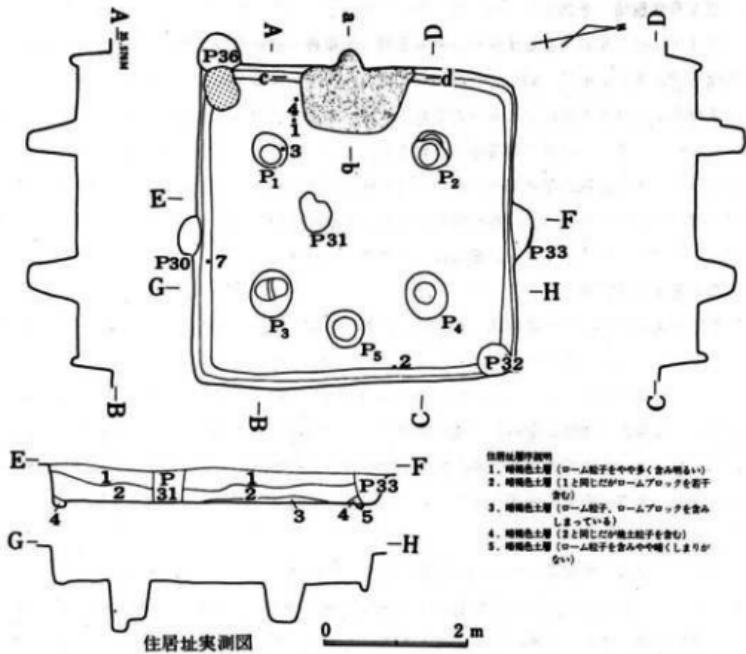
2. 杯形土器 東壁下中央の床面上より出土。口径の約半分が現存し、復原実測による。外縁を有し、口辺部は短かく内傾して立ち上がる。口径10.0cm(推定)、現存高3.0cmを測る。胎土は細砂粒を含むが精選され、色調は内面は黒色処理が施され、外面は茶褐色を呈する。焼成は堅固である。外面は、口辺部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。

3. 杯形土器 P₁内に床面より14cm落ち込んだ状態で出土。口径の約半分が現存する。素縁口辺を呈し、口径12.8cm、器高4.5cmを測る。胎土は、細砂粒を含むが精選され、色調は内面淡茶褐色ないし黒色、外面は淡茶褐色を呈する。焼成は堅固である。外面は口辺部ヨコナデ、体部はヘラケズリの後に一部に粗いヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。

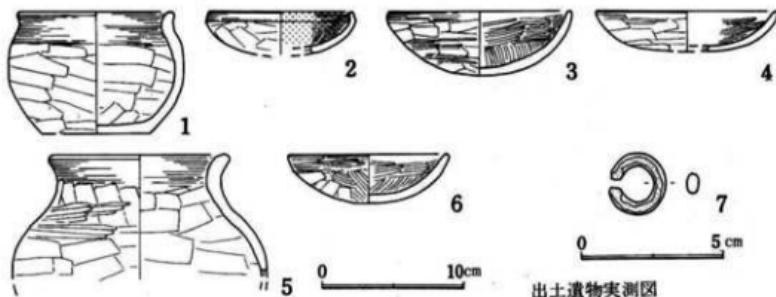
4. 杯形土器 カマド西の床面より10cm浮いた状態で出土。口径の約半分が現存し、復原実測による。素縁口辺を呈し、口径12.6cm、推定器高2.8cmを測る。胎土は、細砂粒を含むが精選され、スコリアの赤い粒子を含む。色調は、内面淡茶褐色、外面茶褐色を呈し、焼成は堅固である。外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。

5. 巍形土器 覆土よりの出土。口辺部から胴中央部までが現存する。口径は全周し、肩部から胴部は約半分が現存し、復原実測による。口径12.6cm、現存高8.6cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内外面茶褐色、焼成は堅固である。外面は、口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリの後一部にヘラナデ、内面は口辺部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ、胴部ヘラナデが施される。

6. 杯形土器 覆土より出土。口径の約半分が現存する。わずかな外縁を有するが、これはヘラケ



第19図 第9号住居址実測図(1)



第20図 第9号住居址実測図(2)

ズリにより作り出されたものである。口径11.4cm、器高3.4cmを測る。胎土は小砂粒を多く含み、色調は内面は黒色ないし茶褐色、外面は茶褐色を呈する。焼成は堅固である。外面は、口辺部ヨコナデの後に所々ヘラミガキ、体部はヘラケズリの後に粗いヘラミガキが施される。内面はヘラミガキにより調整される。

7. 耳環 南壁下の床面上より出土。青銅製の耳環で銀メッキが施される。全長22mm、断面は梢円形で7×4mmを測る。表裏面とも、中央部は銀が剥落し、地金が出ている。

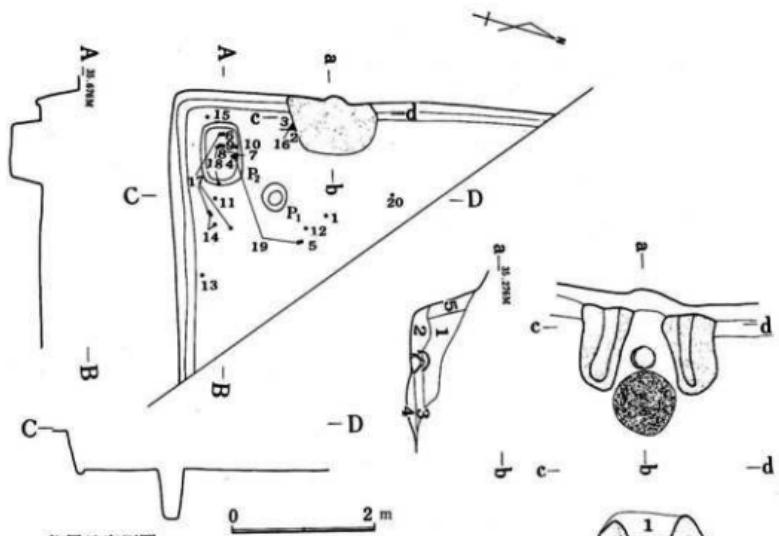
本住居址は、出土遺物等から古墳時代後期の鬼高期の所産と考えられる。

第10号住居址（第21図）

本住居址は、単独で存在するが、大半は調査区域外に位置し、南壁と西壁および床面の一部を検出した。平面形は、方形を呈すると思われるが、規模は不明である。住居址の主軸方向は西南西を示すと思われる。壁は、南・西壁の一部を検出し、やや傾斜して立ち上がる。床面は、中央部はロームの直床でよくしまっており、壁の近くは貼床である。周溝は、検出した範囲では全周する。ピットはP₁、P₂の2個検出された。P₁は主柱穴のひとつと考えられ、P₂は貯蔵穴である。平面形は隅丸長方形を呈し、深さは40cmを測る。カマドは西壁中央よりやや南寄りに位置する。粘土により構築されている。焚口は、やや掘りくぼめられ、底面は非常によく焼けていた。燃焼部中央には、22の高杯形土器が伏せられた状態で出土し、上に21の杯形土器が重なっていた。

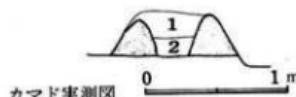
出土遺物（第21・22図）

本住居址より出土した遺物は、土師器のみである。住居址を完掘していないにもかかわらず、多くの土器が出土している。土器は貯蔵穴を中心とした位置に集中して出土し、すべてが床面密着ないし、貯蔵穴内の出土である。

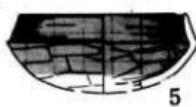
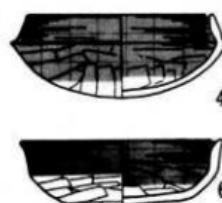
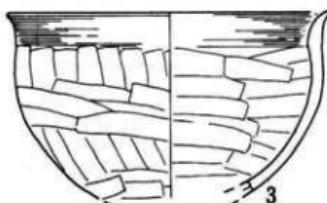
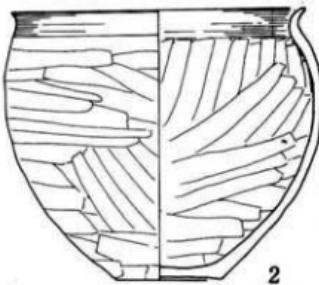
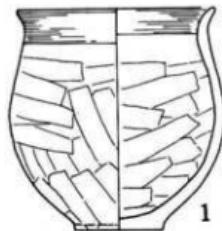


住居址実測図

- カマド窓序説明
 1. 布施色土壁 (粘土粒子を多量に含みローム粒子をわずかに含む)
 2. 布施色土壁 (より粘土が少ない)
 3. 布施色土壁 (ローム粒子で粘土粒子を多く含む)
 4. 粘土・地土アローナ
 5. 布施色土壁 (ローム粒子を多く含み粘土をわずかに含む)



カマド実測図



出土遺物実測図(1)



第21図 第10号住居址実測図(1)

1. 小形甕形土器 P₁の北の床面上より出土。全体の約半分が現存するが、接合しない部分があり復原実測による。底部は、やや突出し木葉痕がみられる。口径13.8cm、器高15.5cm、底径6.1cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内面暗茶褐色、外面は赤褐色を呈する。焼成は堅固だがもろい。外面は口辺部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ、内面は口辺部ヨコナデ、胴部はヘラケズリが施される。

2. 甕形土器 カマドわきの床面上より出土。口辺部の約半分を欠くが完形である。口辺部は短かく弱く外反し、胴部はゆるやかに弯曲して底部に至る。底部はヘラケズリされ、やや上げ底である。口径20.6cm、器高18.8cm、底径7.2cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内面暗褐色ないし黒色、外面は茶褐色を呈する。焼成は堅固である。外面は、口辺部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後一部粗いヘラナデ、内面は口辺部ヨコナデ、胴部はヘラケズリが施される。

3. 鉢形土器 カマドわきの床面上より出土。口辺部は約半分現存し、復原実測による。口径22.4cm、現存高13.0cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内面茶褐色、外面赤褐色を呈する。焼成は堅固である。外面は口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面は口辺部ヨコナデ、胴部ヘラナデが施される。

4~17は、丸底をもつ杯形土器である。それぞれ器形は異なるが、胎土・色調・焼成および器面調整手法は共通する。いずれも、胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面とも茶褐色ないし橙褐色を呈し、内外面とも赤色塗彩される。焼成は堅固である。器面調整は、口辺部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、体部内面はヘラナデが施されている。

4. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より5cm浮いた状態で出土。完形である。外縁を有し、口辺部は内傾して立ち上がる。口径13.0cm、器高5.8cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも底面を塗り残している。

5. 杯形土器 P₁の北東の床面上より出土。口径の約半分現存する。外縁を有し、口辺部は内傾して立ち上がる。口径11.6cm、推定器高5.4cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも底面を塗り残している。

6. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より出土。口辺部の一部を欠くが完形である。外縁を有し、口辺部は外反して立ち上がる。口径14.2cm、器高4.6cmを測る。赤色塗彩は、口辺部のみに施される。

7. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より5cm浮いて出土。口径の約半分現存し、復原実測による。外縁を有し、口辺部は外反して立ち上がる。口径16.4cm(推定)、器高4.8cmを測る。赤色塗彩は、内面の底面以外全面に施される。

8. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より出土。口径の約半分弱現存し、復原実測による。外縁を有し、口辺部は比較的短かく外反する。口径13.8cm、器高4.5cmを測る。赤色塗彩は、内外面全体に施される。

9. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より出土。口径の約半分現存し、復原実測による。外縁を有し、口辺部は短かく直立する。口径14.4cm、器高5.0cmを測る。赤色塗彩は、内面の底面以外の全面に施される。

10. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内の底面より出土。完形である。底の深い土器で、口辺部はゆるやかに外反する。口径16.6cm、器高7.3cmを測る。赤色塗彩は、口辺部にのみ施される。

11. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)の東の床面上より出土。口辺部の一部を欠くが完形である。底が深く、口辺部はゆるやかに外反する。口径14.6cm、器高5.8cmを測る。赤色塗彩は、内外面の底面を塗り残し、内面の塗り残した部分に、幅1cmで十文字に塗っている。

12. 杯形土器 P₁の北の床面上より出土。口辺部と底部の一部を欠くが完形である。底が深く、口辺部は内弯し、口唇部内面に棱をもつ。口径12.6cm、器高5.5cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも口辺部のみに施し、内面の底面には幅2.6cmで十文字に塗っている。

13. 杯形土器 南壁下の床面上より出土。口径の約半分現存する。外縁を有し、口辺部は短かく内傾する。口径14.2cm、器高5.5cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも口辺部のみに施し、内面の底面には幅1.7cmで十文字に塗っている。

14. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)の東の床面上より2片に割れて出土。底部の一部を欠くが完形である。素縁口辺で、口径14.6cm、現存高5.3cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも底面を塗り残す。

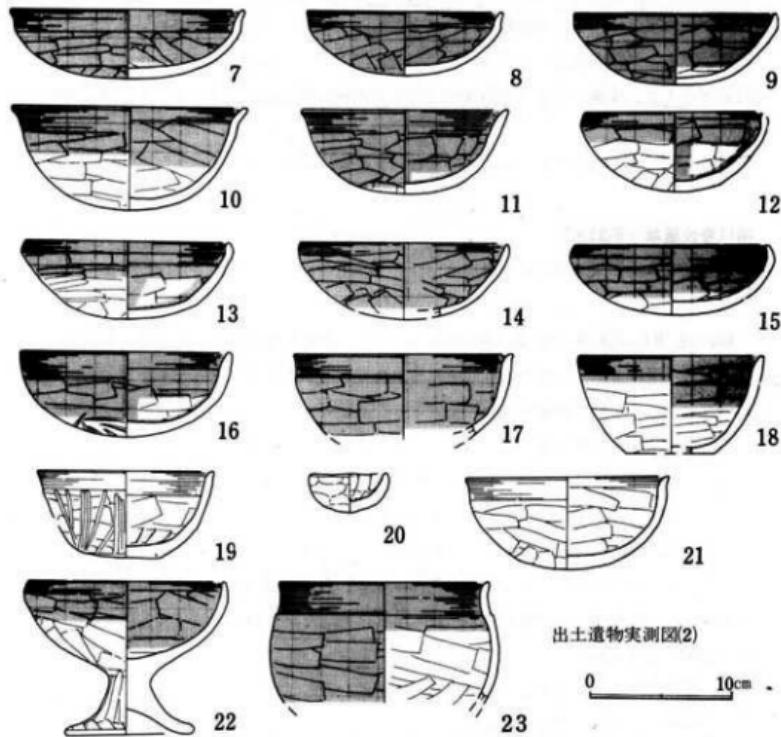
15. 杯形土器 住居址南西隅の床面上より出土。完形である。素縁口辺で、口辺部は内弯する。口径13.6cm、器高4.9cmを測る。赤色塗彩は、底面を塗り残している。

16. 杯形土器 カマドわきの床面上より出土。口径の約半分現存し、復原実測による。素縁口辺で、底の深い器形である。底部外面に10条程の擦痕があり、砥石として利用されたと思われる。口径14.8cm、器高6.0cmを測る。赤色塗彩は、内外面とも口辺部にのみ施し、内面の底面には幅1.8cmで十文字に塗っている。

17. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)東側の床面上の2片と、貯蔵穴内底面出土の計3片が接合した。口径の約半分現存し、底部を欠く。弱い外縁を有し、口辺部は直立する。口径15.5cm、現存高6.0cmを測る。内外面とも赤色塗彩が施される。

18. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)上面の1片（床面より7cm貯蔵穴内に落ち込んで出土）、と貯蔵穴底面出土の1片が接合した。口径の約半分現存し、復原実測による。平底を有し、口辺から底部まで直線的な形状を呈する。口径13.0cm（推定）、器高6.9cm、底径6.0cm（推定）を測る。杯形というより、椀形に近いものである。口辺部内外面のみに赤色塗彩が施される。胎土・色調・焼成および器面調整手法は他の杯形土器と同じである。

19. 杯形土器 貯蔵穴(P₂)内底面出土の1片と、P₁北側の床面上出土の1片が接合した。口径の約半分現存する。口径12.4cm、器高6.1cm、底径5.4cmを測る。胎土・色調・焼成は他の杯形土器と同様だが、外面へラケズリの後に粗いヘラミガキが施される。



第22図 第10号住居址実測図(2)

20. 手捏ね土器 カマドの北側床面上で出土。完形である。口径5.4cm、器高2.8cmを測る。胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面茶褐色を呈する。焼成は堅固である。内外面全面に、指頭によるナデとオサエが認められる。

21. 杯形土器 カマド内出土。完形である。弱い外棱を有し、口辺部は外反する。口径14.3cm、器高6.5cmを測る。胎土・色調・焼成および器面調整は、他の杯形土器と知らない。

22. 高杯形土器 カマド内出土。完形である。杯部は底が深く、口辺部はやや内湾する。脚部は小さく「ハ」の字形に拡がる。口径13.8cm、器高10.7cm、裾径9.0cmを測る。胎土は小砂粒を多く含み、色調は内外面茶褐色を呈し、外面口辺部と内面の底面以外には赤色塗彩が施される。焼成は堅固である。外面口辺部は、ヨコナデ、杯部体部から脚部にかけてはヘラケズリ、内面

杯部はヨコナデとヘラナデが施される。

23. 梶形土器 覆土より出土。口径は全周し、復原実測による。体部はややふくらみ、口辺部は直立気味に外反する。口径14.8cm、現存高8.5cmを測る。胎土は、小砂粒を多く含み、色調は内面暗褐色、外面茶褐色を呈する。外面全面と、内面口辺部は赤色塗彩が施される。外面は、口辺部ヨコナデ、体部ヘラケズリの後ヘラナデ、内面は口辺部はヨコナデ、体部はヘラナデが施される。

本住居址は、出土遺物等から古墳時代後期の鬼高期の所産と考えられる。

(村山好文)

第11号住居址（第23図）

本住居址は、調査区域北端部の斜面において、検出された。北壁の一部は、斜面のため消失しており、南西コーナーは、調査区域外のため調査できなかった。平面形は、方形を呈し、305cm×332cmを測る。現存する壁は、垂直に立ち上がり、保存状態は良い。床面は、平坦で、ロームを床とし、堅緻であり、壁近くは貼床が施されている。周溝は、住居址を全周すると考えられる。カマドは、東壁と西壁の中央に位置する。東壁カマドは、良質な粘土でつくられた両ソデのみ残存する。床面から若干掘り込んである。両ソデの内側と煙道部は、よく焼けている。西壁カマドは、粘土でつくられた両ソデを残存している。火床部、煙道部、両ソデの内側が、よく焼けている。杯形土器が、火床部上12cmより伏せられて出土している。これらのカマドは、新旧なく、同時期に使用されていたと考えられる。本住居址中央には、ピットを伴なう小竪穴が、住居址の床面を切っているのが検出された。

本住居址は、確認調査（伊藤1983）において検出された第2号住居址である。

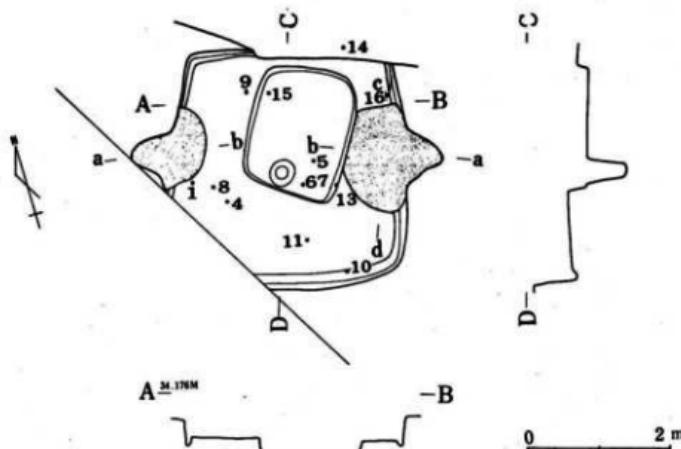
出土遺物（第24・25図）

本住居址より出土した遺物は、土師器片、鉄製品、石製品であり、図示したうち5・6・7・15は、小竪穴に伴なう遺物である。

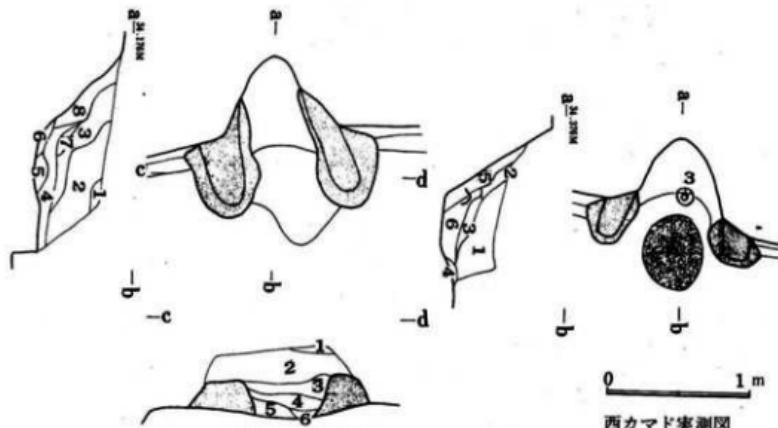
1. 製形土器 西壁カマド正面の床面上5cmより出土。 $\frac{3}{4}$ を現存し、推定口径20.8cmを測る。口縁部は、頭部から強く外反し、外面に直立する面を作り、内面に棱を有する。口縁部は、横ナデが施され、胴部外面は、タタキ目のようにヘラ削り調整を行ない、内面は、ヘラナデである。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、褐色を呈する。

2. 製形土器 西壁カマド内より出土。推定底径15.8cmを測る。底部から強く内弯して立ち上がる胴部は、一定した器厚を保ちながら中位に至る。胴部中位外面は、タタキ目が施され、下位は、ヘラ削り、内面はヘラナデが施される。底部は、ヘラナデである。胎土は、粗砂粒、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内面暗黄褐色、外面赤褐色を呈する。

3. 杯形土器 西壁カマド火床部上12cmより出土。完形であり、口径13.9cm、底径6cm、器高4.5cmを測る。凹凸のある底部から、ゆるやかに内弯しながら立ち上がる体部は、内外面に凹



住居址実測図

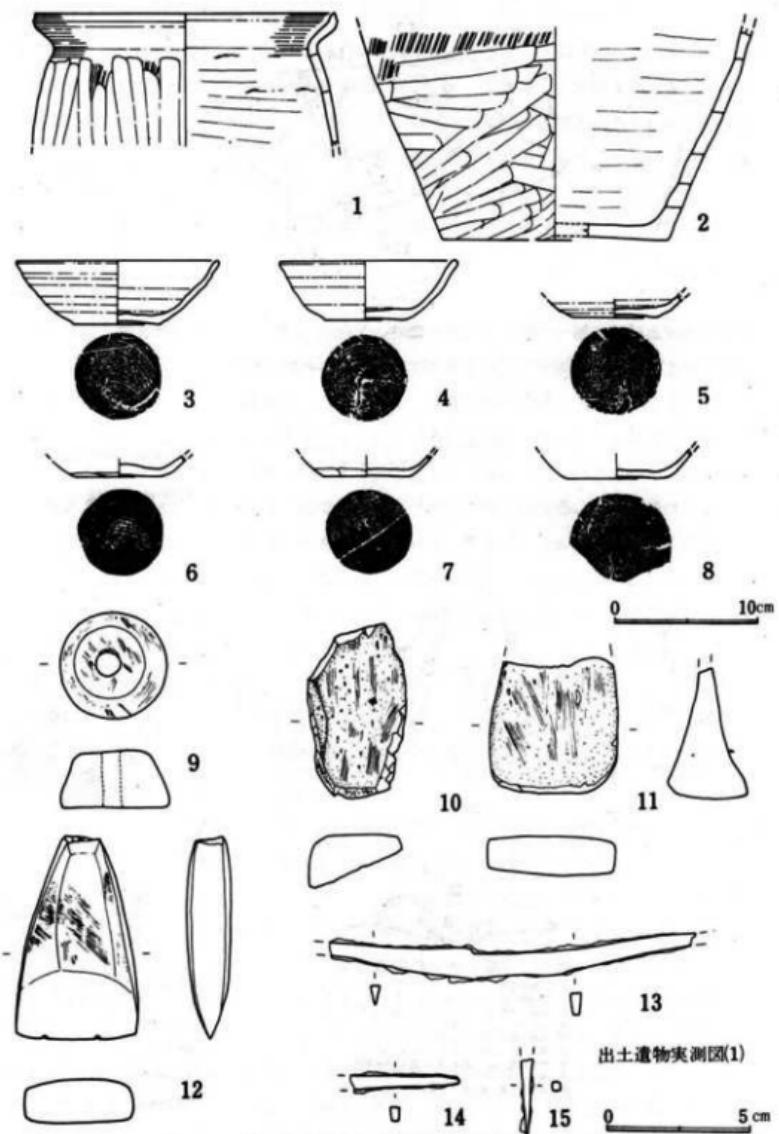


東カマド実測図

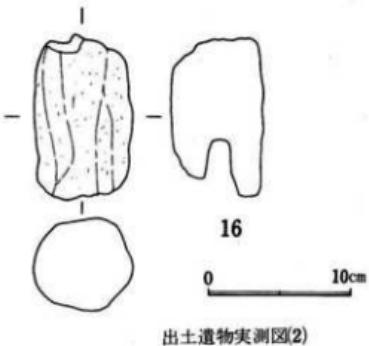
- カマド層序説明
1. 黒褐色土層
 2. 噴褐色土層 (ローム粒子を含み粘土を若干含む)
 3. 粘土 (ローム粒子を若干含む)
 4. 灰層 (粘土、粘土粒子を若干含む)
 5. 地下 (ローム粒子、粘土、灰を若干含む)
 6. 噴褐色土層 (ローム粒子、粘土、灰を含む)
 7. 粘土ブロック
 8. 噴褐色土層 (粘土粒子、粘土ブロックを若干含む)

- カマド層序説明
1. 黒褐色土層 (ローム粒子・粘土粒子を多く含み
粘土粒子を若干含む)
 2. 粘土 (ローム粒子を含む)
 3. 赤褐色土層 (粘土粒子、ローム粒子、粘土ブロ
ックを含む)
 4. 黑褐色土層 (灰、粘土粒子、粘土ブロックを含
む)
 5. 噴赤褐色土層 (灰、粘土粒子、粘土ブロックを
多く含む)
 6. 噴赤褐色土層 (主よりローム粒子、ロームブロ
ックを多く含む)

第23図 第11号住居址実測図(1)



第24图 第11号住居址实测图(2)



第25図 第11号住居址実測図(3)

底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を密に含み、焼成は、良好。色調は、黄褐色を呈する。

5. 杯形土器 小豎穴底面上14cmより出土。底径6cmである。体部は、内外面にロクロ成形痕を有し、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成良好。色調は、褐色。

6. 杯形土器 小豎穴の底面上30cmより出土。底部中央の器厚が、非常に厚い。体部は、ロクロ成形で、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削り調整が行なわれる。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、褐色を呈する。

7. 杯形土器 小豎穴の床面上30cmより出土。底径6cmを測る。体部は、底部から強く内弯して立ち上がる。体部はロクロ成形で、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、手持ちヘラ削りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、褐色を呈する。

8. 杯形土器 西壁カマド前の床面上15cmより出土。底径7cmを測る。体部は、底部からゆるやかに内弯して立ち上がる。体部は、ロクロ成形、底部は、回転糸切りの後に周縁をヘラ削り調整されている。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、明黄褐色を呈する。

9. 紡錘車 住居址北西部の床面上11cmより出土。滑石製である。径3.7cm、厚さ2cmを測り、中央に径0.9cmの孔を有する。

10. 砥石 南壁下の周溝内より出土。砂岩である。現存長6.2cm、幅3.3cmを測る。

11. 砥石 住居址中央南寄りの床面上5cmより出土。砂岩である。現存長4.7cm、幅4.5cmを測る。中程は、擦減って非常に薄くなっている。全面使用している。

12. 磨製石斧 住居址北側の斜面より出土。縄文時代。完形であり、厚さ7cm、幅3.8cm、厚さ1.5cmを測る。基部に自然面を残す。刃部に刃こぼれがある。

13. 刀子 東壁カマド正面の床面上25cmより出土。身と茎の一部を欠損する。現存長12.4cm、幅0.8cmを測る。

凸を持ち、口縁部は、若干外反する。体部は、内外面ともロクロ成形痕を残し、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、暗黄褐色を呈する。

4. 杯形土器 西壁カマド前の床面上13cmより出土。完形であり、口径12.3cm、底径5.5cm、器高4.1cmを測る。器厚の厚い底部から強く内弯して立ち上がる体部は、上位において若干外反し、口縁部に至る。体部は、内外面ともロクロ成形で、

14. 刀子 住居址北東部より出土。茎の基端部のみ現存。現存長3.8cm、幅0.4cmを測る。
15. 鉤 小豎穴の底面上11cmより出土。幹部先端のみ現存。現存長2.7cm、幅0.3cmを測る。
16. 土製支脚 東壁カマド北側の床面直上より出土。両端部を欠損する。現存長11cm、径6.9cmを測る。

本住居址は、住居址の規模・形態及び出土遺物より、国分期の住居址と考えられる。

(中西克也)

第12号住居址（第4図）

本住居址は、第1号住居址の南東隅において、わずかに検出された。第1号住居址、第2号住居址、第1号溝の重複するすべての遺構に切られている。平面形は、方形を呈すると思われるが、規模は不明である。住居址の南東隅の一部を検出したのみであるが、壁はほぼ垂直にしっかりと立ち上がる。床面は貼床で、周溝が検出された。ピットは、第1号住居址の床面を精査した結果P₁～P₄の4個検出された。いずれも、本住居址の主柱穴と考えられる。検出された南東隅の壁の形状と主柱穴の位置から、主軸を北西にもつ方形の住居と推定される。カマドは、検出されなかった。

本住居址は、わずかに残存したのみで、出土遺物は土師器小片のみであった。これらの土師器小片は、鬼高窓のものと考えられた。従って、住居址形態および出土遺物から、本住居址は古墳時代後期の鬼高窓の所産と考えられる。

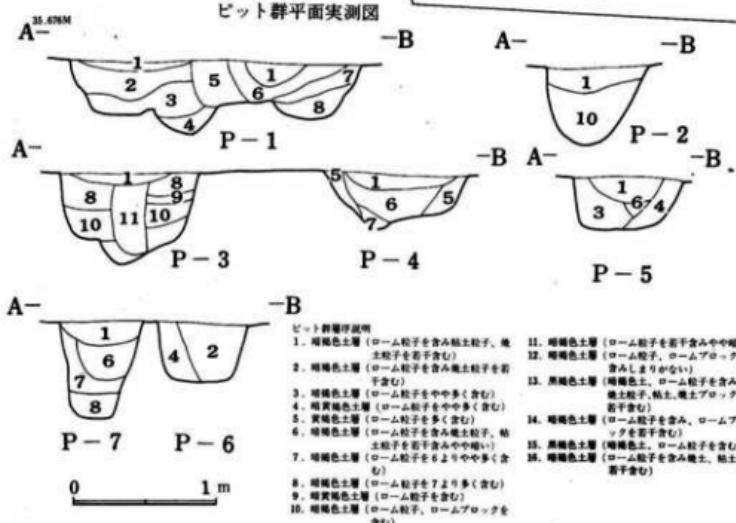
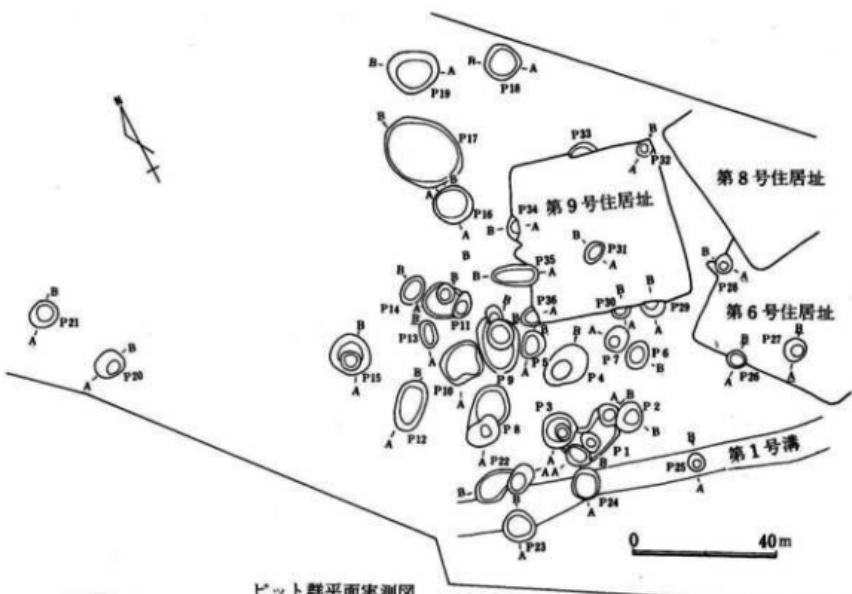
(村山好文)

2. ピット群（第26・27・28図）

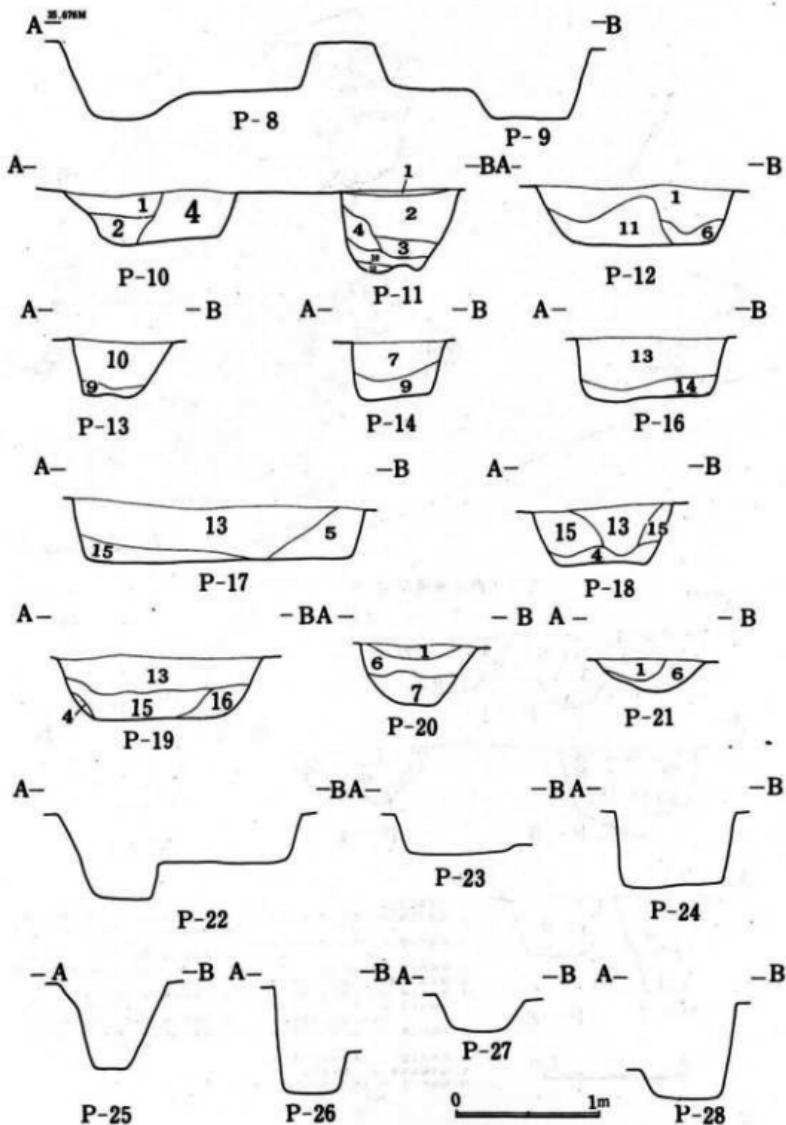
ピット群は、調査区域のほぼ中央部に検出された。ピットは、第6・9号住居址を切っており、第1号溝によって切られている。ピットは、P1～P36まで検出され、分布と覆土によって、3グループに分ける事ができる。P1～P15・P22～P36が1グループであり、多くのピットが集中しているが、規則性は無い。次に、覆土中に焼土粒子・焼土ブロックを含むP16～P19が分けられる。最後のグループは、P20・21であり、離れた位置より検出された。これらのピットは、ほとんど遺物を出土しなかったが、P1と第6号住居址のカマドを切るP28は、完形の杯形土器を出土する。また、P5より出土した須恵器の變形土器の口縁部は、第4号住居址の12の變形土器と接合した。

出土遺物（第29図）

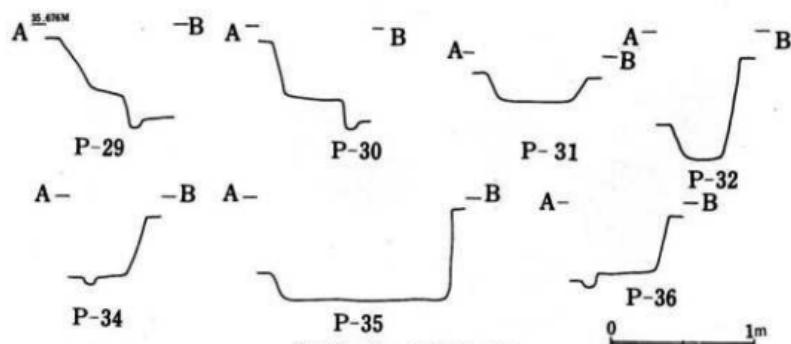
1. 杯形土器 P1より出土。完形であり、口径13cm、底径6.4cm、器高4.4cmを測る。一定の器厚の底部から強く内窵して立ち上がる体部は、内外面に凹凸面を有し、上位において、若干外反する。体部は、ロクロ成形痕を明瞭に残し、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削りで調整されている。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、黄褐色を呈する。底部外面に墨書文字が有る。



第26図 ビット群実測図(1)



第27図 ピット群実測図(2)



第28図 ピット群実測図(3)

2. 杯形土器 P 1より出土。推定口径12.6cm、底径5.5cm、器高4cmを測る。体部は、底部よりゆるやかに内弯して立ち上がり、上位において、外反する。体部は、内外面ともロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削り調整である。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好。色調は黄褐色。外底外面に墨書き文字が有る。

3. 杯形土器 P 17より出土。底径6cmを測る。底部は、中央部の器厚が薄く、体部は内弯して立ち上がる。体部は、ロクロ成形であり、底部は、回転糸切りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内面暗黄褐色、外面明黄褐色を呈する。

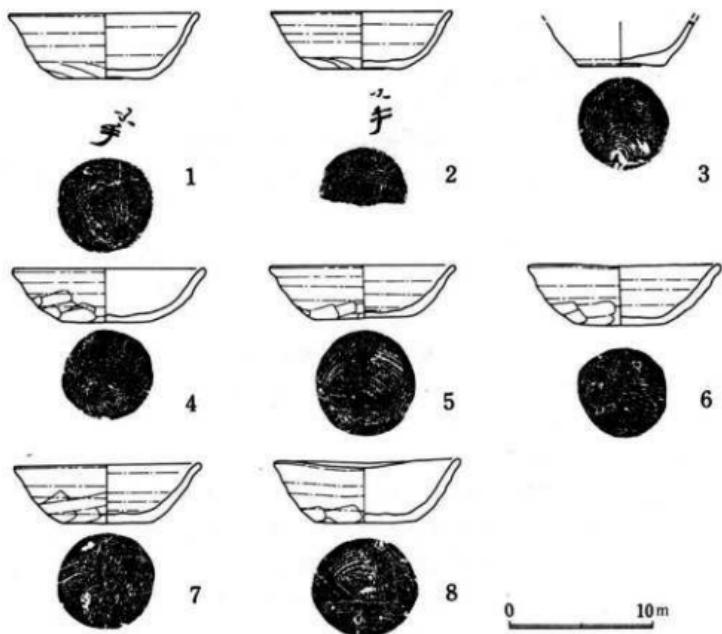
4～8は、P 28より出土した杯形土器である。

4. 完形であり、口径12.5cm、底径6cm、器高3.8cmを測る。体部は、底部よりゆるやかに内弯して立ち上がり、上位において外反する。体部は、ロクロ成形で、外面にロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、手持ちヘラ削り調整されているため、切り離しは不明。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、褐色を呈する。

5. 完形であり、口径12.8cm、底径7cm、器高3.7cmを測る。薄い器厚の底部からゆるやかに内弯して立ち上がる体部は、器厚が厚くなり、上位になるにしたがい再び薄くなり、外反する。体部は、内外面ともロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが行なわれる。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削り調整されている。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、褐色を呈する。

6. 完形であり、口径13.2cm、底径6.4cm、器高4.4cmを測る。底部から強く内弯して立ち上がる体部は、内外面に凹凸面を持ちながらひろがり、口縁部が若干外反する。体部は、ロクロ成形痕を明瞭に残し、外面下半は、ヘラ削りが施される。底部は、手持ちヘラ削りによって調整されている。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、褐色を呈する。

7. 完形であり、口径12.8cm、底径6.4cm、器高4.1cmを測る。体部は、底部から強く内弯し



ピット群出土遺物実測図

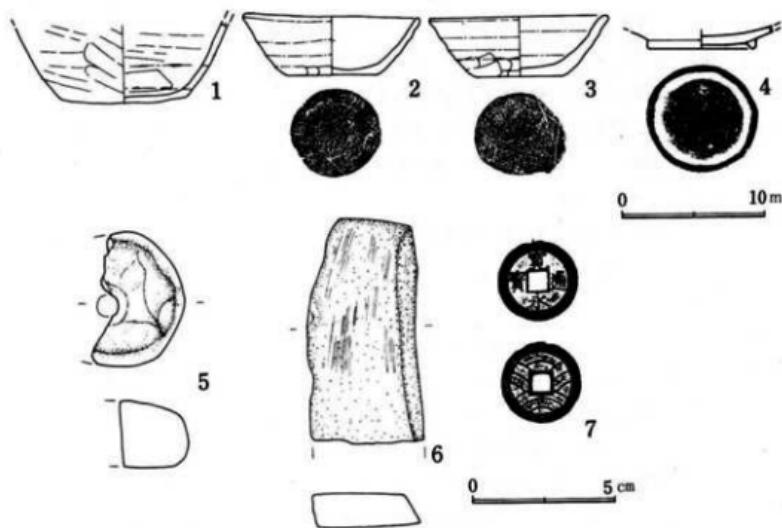
第29図 ピット群実測図(4)

て立ち上がり、口縁部において外反する。体部は、内外面ともロクロ成形痕を残し、外面下半は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削り調整される。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は、良好。色調は、内外面とも褐色を呈する。

8. 完形であり、口径12.8cm、底径7.1cm、器高4.3cmを測る。底部から強く内弯して立ち上がる体部は、直線的にひろがる。体部は、内外面にロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、回転糸切りの後に手持ちヘラ削りにより調整される。胎土は、粗砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、褐色を呈する。

3. 溝状遺構(第3図)

本調査により検出された溝は、3基であり、住居址との関係はなく、近世から近代の溝と考えられる。第1号溝は、ピット群の一部を切り、第1・4・12号住居址を切り、調査区域外に延び、第3号溝と交わると思われる。幅は150~170cm、深さ40~60cmを測り、断面はV字状を



第30図 表採遺物実測図

呈し、底部は平坦である。第2号溝は、第12号住居址の東側に検出される。幅は80cm、深さは50cmを測り、断面はV字状を呈する。第3号溝は、第3号住居址の西側に検出され、調査区域外に延びている。第2号溝を切っている。幅は190cm、深さ33cmを測り、断面はU字状を呈し、底面は、若干凹凸がある。出土遺物は、無い。

4. 表彩遺物(第30図)

本遺跡において、表採された遺物は、数多くあるが、図示し得るのは、次の7点のみである。

1. 変形土器 底径8.8cmを測る。胴部は、底部から強く内弯して立ち上がる。胴部外面は、ヘラ削り、内面はナデが施される。胴部内側に、2ヶ所の輪積み痕が残っている。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、内面黄褐色、外面暗黄褐色を呈する。

2. 杯形土器 ピット群付近より出土。完形であり、口径12.1cm、底径6.2cm、器高4.1cmを測る。体部は、底部から強く立ち上がり、直線的にひらく。体部は、内外面にロクロ成形痕を残し、外面下端部は、ヘラ削りが施される。底部は、手持ちヘラ削りにより調整される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、褐色を呈する。

3. 杯形土器 ピット群付近より出土。 $\frac{1}{3}$ を現存し、推定口径12.2cm、底径6cm、器高4.1cmを測る。体部は、底部からゆるやかに内弯して立ち上がり、口縁部で若干外反する。体部は、

内外面にロクロ成形痕を有し、外面下半は、ヘラ削りが施される。底部は、手持ちヘラ削りである。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、褐色を呈する。

4. 高台付杯形土器 底径7.7cmを測る。高台は、短かく、接地面は内側にある。ロクロ成形で、底部は、回転糸切りの後に周縁を高台貼付による横ナデが施される。内面の一部に自然釉がかかっている。胎土は、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は、明灰色を呈する。

5. 土製紡錘車 $\frac{1}{2}$ を現存する。直径4.8cm、厚さ2.4cmを測り、中央に推定径0.8cmの孔を有する。色調は、褐色を呈する。

6. 砥石 石質は、砂岩である。片端を欠損し、現存長7.9cm、幅3.8cm、厚さ1.2cmを測る。使用面は、3面である。

7. 寛永通宝

(中西克也)

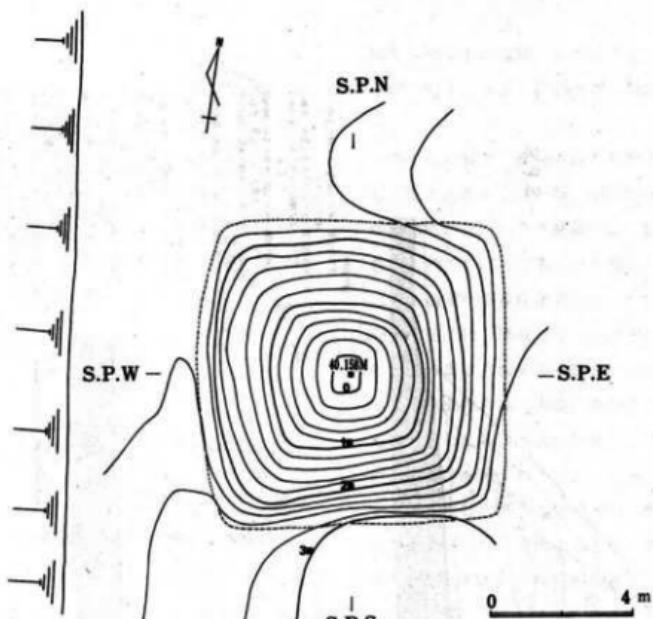
5. 「塚」

「塚」は、南側と北側を小支谷によって隔てられた、標高37mの狭い台地上に2基ならんで存在する。(付図・第2図) 今回調査されたのは、東側の「塚」で、旧道路を隔てた西側20mには、ほぼ同一規模のもう一基が存在する。この西側の塚は、南面を現代の墓として利用しており、墓石が建てられている。これらの塚は、町教育委員会には名称等の記録は残っておらず、今回はただ「塚」として報告することとする。なお、地元民の話では先代より、「せんぶ塚」と呼んでいたということである。「せんぶ塚」が「干部塚」をさすものであるとすれば、経塚ないし供養塚であることが考えられる。

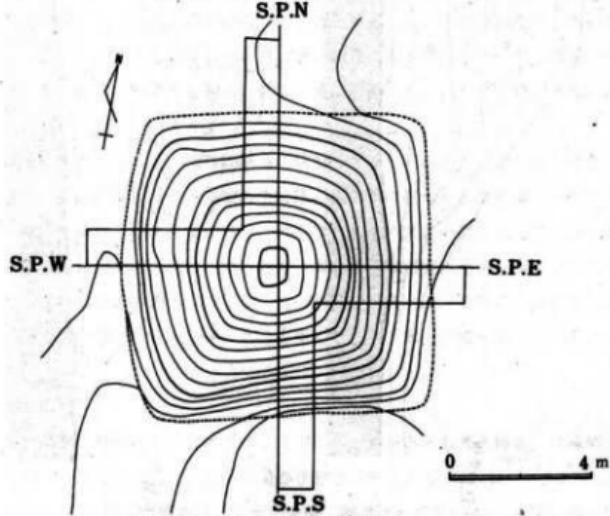
「塚」の平面形は、ほぼ方形を呈し、主軸はほぼ南北を示す。1辺は約8.5mで、盛土の高さは約2.6mを測る。(第31図) 調査は、墳頂部を中心とした東西・南北の幅1mの土層観察用のあぜを残し、すべての盛土を除去する方法で行なった。(第32図) このセクション・ベルトで区画された4区を、それぞれ北西区・北東区・南西区・南東区と呼ぶこととした。掘り下げは、北東区と南西区より開始し、地山面まで下げた後、北西区・南東区を掘り下げた。盛土は、旧表土面(第12層)から積み上げられ、ほぼ水平に土を盛りあげている。特に固くしまっている層ではなく、表層およびそれに近い層(第1~3層)は、全体に木根によるかなりの搅乱を受けている。(第33図)

遺物出土状態(第33・34図)

「塚」の盛土中からは、繩文土器片や土師器・須恵器片が出土しているが、これらは盛土の中に混入していたもので、「塚」に伴うものとは考えられない。「塚」に伴う遺物は、墳頂下の旧表土面上から出土している。(第33・34図) まず、北東区からNo.1の双盤が出土し、全体を掘り出したところ、近接して並んだ状態でNo.2の和鏡が検出された。つづいて、南西区からNo.4、No.5の小皿が並んで出土した。No.4、No.5は、同一レベルで出土し、旧表土面に位置している。

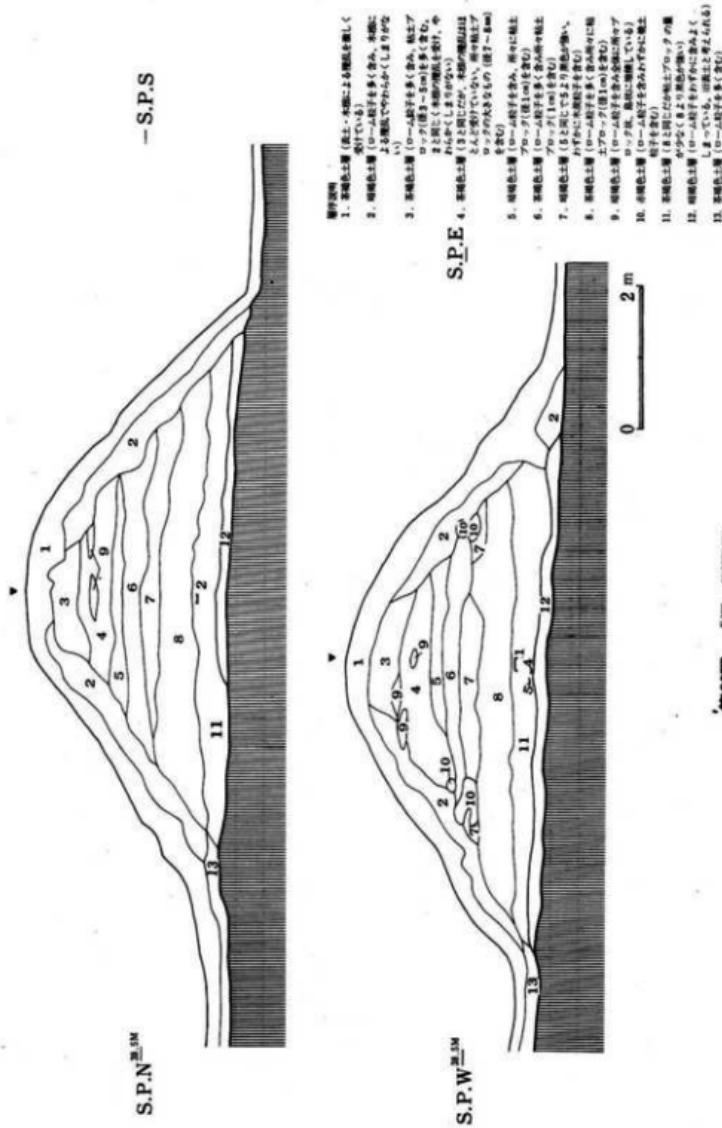


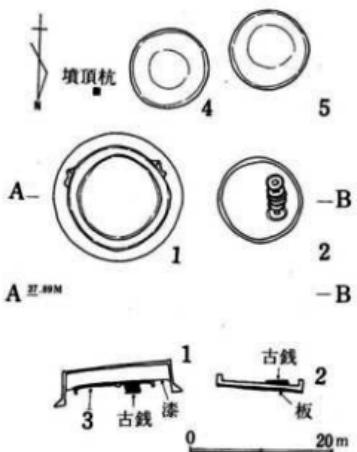
第31図 「Kaze」平面図



第32図 「Kaze」発掘区設定図

第35図 「寒」断面図





第34図 「塚」 遺物出土状態図

かすが検出された。これが布であったとすれば、このNo.1とNo.3はまとめて布の袋に入れてあった可能性が考えられる。

No.2の和鏡は、No.1と接して出土した。中には、No.3の和鏡と同様に古銭（寛永通宝）が6枚乗せられた状態で出土した。古銭の周囲には、白い布と思われるかすが検出され、古銭を包んでいた布と考えられる。No.2の底面には、非常に薄い板状の木が付着していた。木目が残っており、杉の曲物と思われる。No.2の和鏡は、曲物の箱に収められていたが、鏡の底面に密着していた部分のみが残存したのである。

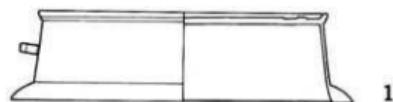
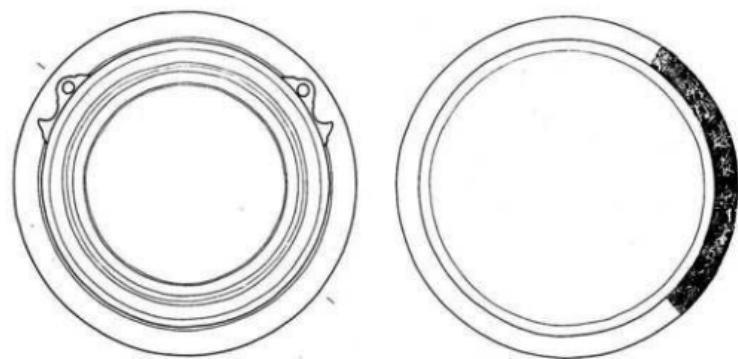
以上の遺物の出土状態から推して、遺物埋納時の状態を復原してみると以下のようになる。北に向って右側奥に、双盤が置かれる。双盤の中には、漆の箱に収められた和鏡と6枚の寛永通宝（まとめてしばってある）が入っている。これらは、まとめて布の袋に入っていたと思われる。その隣の左側奥には、曲物の箱に収められた、和鏡と6枚の寛永通宝（布でつつんである）が置かれている。これらの手前の一端下がった（約20cm）所には、2枚の小皿が並んで置かれている。この状態で仏事を行なった後、ここを中心として「塚」を盛り上げたと考えられる。

出土遺物（第35～37図）

第35図1. 双盤。仏具の双盤と考えられるが、その形状から鉦鼓とも考え得る。口縁部は内外面とも鏽による腐蝕が認められるが、全体に遺存状態は良好である。青銅製で、上面径15.0cm、口縁径17.9cm、高さ4.7cmを測る。厚さは、上面で4mm、側面はわずか1.0mmで非常に薄い。表

No.1、No.2もほぼ同一レベルで出土しているが、No.4、5より約20cm高い所に位置する。

No.1の双盤は、伏せられた状態で出土した。No.1を取り上げた所、中にNo.3の和鏡が検出された。No.3の和鏡には、鐵の金具状のものでしばってあったと思われる古銭（寛永通宝）が6枚密着していた。No.1とNo.3の間には、膜状になった漆が検出された。この漆は、おそらくNo.3の和鏡が収まっていた曲物の箱の表面に塗布されていたものと思われる。木質の部分はとけてしまい、漆だけが残ったと考えられる。このNo.1を掘り出した際、周囲の土中に極くわずかであるが、黒い光沢のある布と思われる



1



2



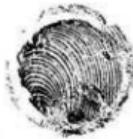
3



4

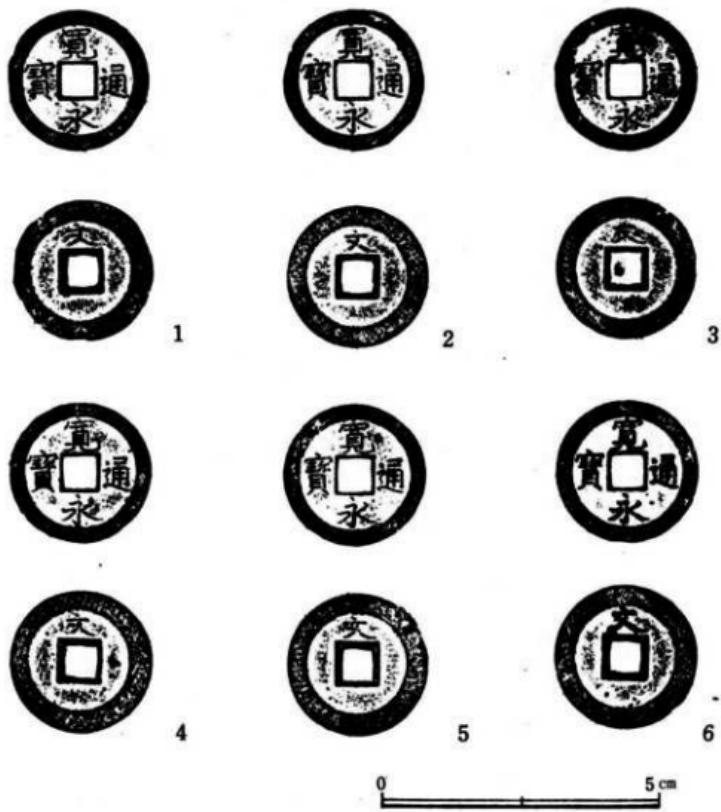


5



0 10cm

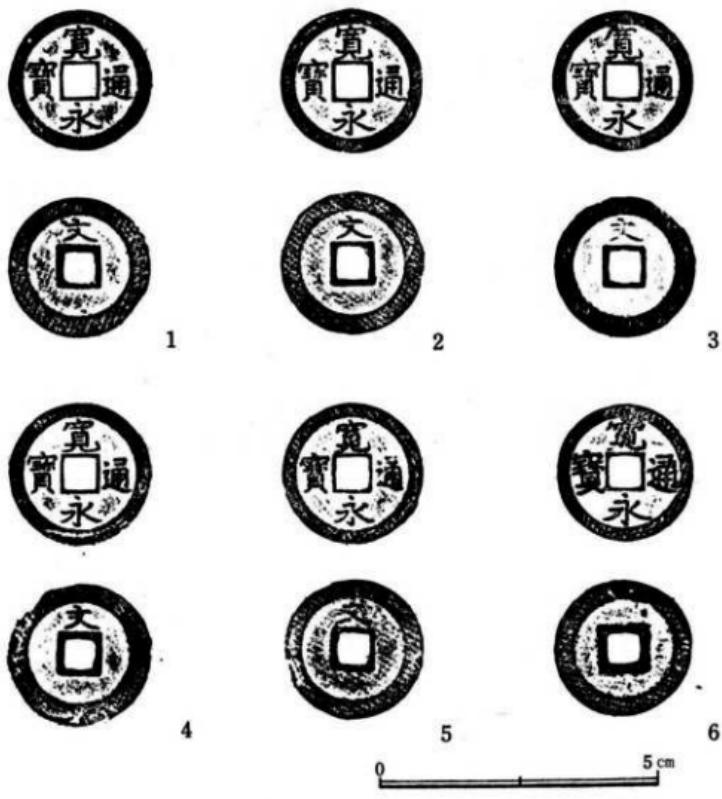
第35圖 「冢」出土遺物實測圖



第36図 「環」出土古銭拓影(1)～No. (和鏡)に伴って出土したもの～

面は平坦で、2本1組の細い凸紐が一周し、中央部はわずかに盛り上げられている。端部はつまみ上げたような縁をもつ。側面中央の両肩には、魚形の耳鉢が付けられ、懸垂のための孔があけられている。口縁部は、駒爪式の張出しが付けられ、一部に陰刻銘が記されている。銘は、「天下一越後守二郎兵衛」と読める。

第35図2、青銅製の和鏡である。鏡の付着もほとんどなく、遺存は良好である。径11.6cm、縁高1.5cmを測る。文様は、松・竹・梅および鶴・亀で構成されている。鏡は径22mm、高さ5mm、孔径5×3mmを測る。鉢は亀を表現しており、頭・尾、四肢、甲羅までみられる。亀の頭の左



第37図 「塚」出土古鏡拓影(2)-No.3 (和鏡)に伴って出土したもの一

に2羽の鶴がくちばしを接している。右下から中央にかけて、松、松の根本の左側には3本の竹、亀の真上には五弁の梅の花びらが一つ配されている。外縁の内側1.8cmには、低い突帯が2重に一周し、以上の文様はこの内側に配されるが、外側にも松の枝や竹と思われる文様がみられる。

第35図3. 1といっしょに出土した青銅製の和鏡である。2に比べ、全体に磨滅が激しい。径11.6cm、縁高0.85cmを測る。地文は、一辺5mmの六角形の亀甲文を施している。亀甲内には、径1mmの4つの円形を組み合せた文様が入る。外縁の内側1.3cmには、低い突帯が一周する。鏡

座は菊座で、径24mm、高さ5mmを測り、3mmの孔が穿たれている。盤の上に、2羽の雀と思われる鳥が配されている。文様は、全体に浅く、かなりの磨滅を受け一部は不鮮明であり、縁や鏡面もかなり擦り減っている。

第35図4・5、土師質の素焼きの皿で、仏具皿と考えられる。4は完形で、口径10.8cm、器高2.2cm、底径6.8cmを測る。ロクロによる成形で、底部は回転糸切り手法による切り離しによる。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面茶褐色、焼成は堅固である。5も完形で、口径11.0cm、器高2.2cm、底径6.9cmを測る。ロクロによる成形で、底部は回転糸切り手法による切り離しによる。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面とも淡茶褐色を呈し、4より明るい色調である。焼成は堅固。

第36図1～6、第35図2の和鏡といっしょに出土した寛永通宝である。いずれも裏面に「文」の一字が認められる。

第37図1～6、第35図3の和鏡といっしょに出土した寛永通宝である。1～5は裏面に「文」の一字があるが、6は無文である。

(村山好文)

注1 石田茂作監修「新版仏教考古学講座」第5巻 仏具 1976 雄山閣

V. 考察

古墳時代の遺構・遺物について

本遺跡より検出された遺構は、住居址、ピット群、溝状遺構である。住居址は、12軒検出され、このうち第6号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址、第10号住居址、第12号住居址の6軒は、住居址構造、出土遺物から古墳時代の所産と考えられる。以下、出土土器を中心として、若干の考察を加えたい。

6軒の住居址から出土した土器は、いずれも古墳時代後期の鬼高式土器の範疇に含まれるものである。千葉県下出土の鬼高式土器については、以前にその集成と検討を試みたことがあり、これらを基に本遺跡出土土器の位置づけを行なってみたい。各住居址出土土器の編年的位置づけについては、個々の土器の器形の特徴、全体の組み合せ（セット）に着眼した。

第6号住居址（第16図）

杯形土器、高杯形土器が出土している。5の杯形土器（覆土出土）を除いて、出土状態からいずれも本住居址に伴うものと考えられる。杯形土器は、半球形のものと外縁を有するものがある。高杯形土器は、半球形の杯形土器に、短かく聞く小さな脚を付したものである。以上の土器は、すべて内外面とも赤色塗装が施される。本住居址出土土器は、鬼高第I期ないし第II期に位置づけられ、6世紀前半の年代が与えられよう。

第7号住居址（第17図）

小形腰形土器1点のみが出土している。形状は、鉢形土器に近いものである。鉢形土器は第III期、第IV期に多く存在する傾向があり、本例も該期に位置づけておく。7世紀前後の年代が与えられる。

第8号住居址（第18図）

本住居址からは、腰形土器、杯形土器、高杯形土器、須恵器蓋形土器が出土している。しかし、その出土状態を検討すると、すべてが本址に伴うものとは考えられない。1の腰形土器は床面より15cm浮いて出土し、4・6・7の杯形土器は、30cm以上浮いて出土している。本住居址に伴うと考えてよいと思われるものは、2・3・5の杯形土器および8の高杯形土器である。杯形土器、高杯形土器の特徴から、第IV期に位置づけられる。6・7の杯形土器は、覆土上面の出土であるが、本住居址に伴う土器より1段階新しいものと考えられる。上面出土とはいえ、同じ住居址の埋土中より出土したことを勘案し、7世紀前半のやや新しい段階という年代を考えたい。なお、土器の年代を考えるうえで有効な、須恵器が1点出土しているが、覆土中の出土で小破片であるため、土師器を年代の根拠とした。

第9号住居址（第20図）

本住居址からは、瓊形土器、小形瓊形土器、杯形土器が出土している。5・6の覆土出土の瓊形土器・杯形土器を除き、本址に伴うものと考えられる。小形瓊形土器、杯形土器の特徴から、第Ⅳ期に相当し、7世紀前半の年代が与えられる。なお、床面より、古墳の副葬品として多く検出される耳環が出土している。

第10号住居址（第21・22図）

本住居址は、ごく一部の発掘にもかかわらず、多くの土器が出土している。すべて本址に伴うものと考えられ、瓊形土器・小形瓊形土器・鉢形土器・杯形土器・高杯形土器・手捏ね土器と器種も豊富である。杯形土器の4・5は、須恵器蓋杯の杯身を模したいわゆる「模倣杯」である。外縁の蓋受けも明瞭で、口辺部の立ち上がりも大きく古相を呈する。他の杯形土器は、底が深く、口辺部が外反するもの、半球形のものが主体的で、これらも古い様相がみられる。杯形土器は、19・21を除き、内外面に赤色塗彩が施される。特に、11・12・13・16の4点は、内面底面に、十文字の赤色塗彩が施されている。このような例は、本遺跡に近い所では、芝山町の清水台No.1遺跡の出土品が知られる。多くの杯形土器の特徴から第Ⅱ期に相当すると考えられ、6世紀前半の年代が与えられる。^(注3)

以上、土器を中心として、各住居址の編年的位置づけを行ってみた。鬼高式土器の器種は、瓊形土器・小形瓊形土器・瓶形土器・鉢形土器・杯形土器・椀形土器・高杯形土器・壺形土器が知られている。この中で、本遺跡では瓶形土器と壺形土器がみられなかった。壺形土器は、鬼高式土器の古い段階に、わずかに存在する程度であるから、本遺跡で出土しないことに大きな疑問はない。しかし、瓶形土器は、組成の上で欠くことのできない主要な器種である。図示できる程度に復原しない、瓶形土器の破片は、各住居址に散見されている。また、瓊形土器も、破片は多いものの、器形を復原し得た例はほとんどない。瓊形土器と瓶形土器は、該期の他の遺跡では、比較的多く出土する器種であることから、土器廃棄の問題と関わるものと理解される。本遺跡は、今回の発掘によって検出された住居址がすべてではなく、同一台地上に、まだ何軒かの該期の住居址の存在が十分に考えられる。これが、いずれ調査されることにより、今回不明であった器種を含め、より遺跡の性格が明らかになるであろう。

（村山好文）

注1 a 日本考古学研究所 1981 「房総における鬼高期の研究（資料編）」日本考古学研究所集報III

b 鬼高期研究グループ 1982 「房総における鬼高期の研究（研究編）」日本考古学研究所集報IV

c 千田利明・村山好文 1984 「N千葉県」「古墳時代土器の研究」古墳時代土器研究会 小出義治編

注2 注1 b の文献による。以下も同じ。

注3 植沼修平・村山好文 1980 「清水台No.1遺跡発掘調査報告」同調査会

奈良・平安時代の遺構・遺物について

本遺跡において、奈良・平安時代の遺構は、第1～5・11号住居址、ピット群である。以下これらの遺構・遺物について若干の考察を加える事にする。

住居址

住居址は、第5号住居址を除いて完掘する事ができた。住居址の形態は、方形を呈する。第1・2・4号住居址は1辺4m以上を測り、4本の主柱穴と1本の支柱穴を持ち、カマドを北壁ないし東壁に有する。第3・5・11号住居址は、4m未満の小規模な住居址で、柱穴は検出されずカマドは北壁ないし東壁に位置する。第11号住居址は、北側斜面に単独で検出され、カマドを東壁と西壁に有し、他の住居址と異なる性格を持っている。第4号住居址は、覆土中にカマド構築材らしいスサ入りの焼土ブロック・焼土が層になっており、本住居址廃棄後に他の住居址のカマド構築材を投げ捨てたと考えられる。しかし、検出された住居址のカマドは構築材が使用されておらず、調査区域外に住居址が存在し、集落が広がっていると思われる。

ピット群

ピット群は、調査区域中央に36個のピットが検出された。ピットは、倉庫や掘立柱建物址が重複したものと思われるが、明確に建物と断定する事はできなかった。住居址と切り合い、出土遺物によって、第5・11号住居址よりやや古い時期のものと考えられる。

出土遺物

出土遺物は、土器、鉄器、砥石、紡錘車等であるが、杯形土器と甕形土器のみ取り上げる。

杯形土器　すべて土師器であり、5期に分類できる。第Ⅰ期は第1・2号住居址出土の杯である。第2号住居址1は丸底の底部で、浅い弧状を呈し、2はロクロ使用で平底を呈し、内外面赤彩している。第1号住居址の杯は、平底を呈し、1は浅く、2はやや深目の弧状を呈す。第2号住居址は第1号住居址よりやや古い要素を持つ。8世紀前半～中葉に比定できる。第Ⅱ期は第3号住居址の杯で、底部は静止糸切りの後に周縁をヘラ削り調整する。9世紀前半であると考えられる。第Ⅲ期は第4号住居址の杯で、ロクロ使用で器形、調整が画一され、底部・体部下端をヘラ削り調整する。3は内黒土器である。これらにより9世紀後半にあたると思われる。第Ⅳ期はピット群出土の杯で、口縁部が肥厚外反し、体部下半にヘラ削りを施す。この杯は、9世紀末から10世紀初頭にあたると思われる。第Ⅴ期は第5・11号住居址出土の杯である。底径が6cm前後で小さく、体部は内窪したまま開き、底部は回転糸切りのものと、後に周縁をヘラ削り調整するものがある。本期は10世紀前半～中葉にあたると考えられる。

甕形土器　土師器と須恵器がある。土師器の甕は第3・5・11号住居址より出土。頸部より外反する口縁部が直立する面を持つ器形と頸部から肥厚し緩やかに外反して口唇部下端が突出して直立する器形がある。須恵器の大甕は、第4号住居址より3個体出土。すべて器高40cm以上

を測り、同一の製作法、器形である。このような大腹の出土例は少なく、特筆すべき事である。

(中西克也)

参考文献

シンポジウム資料「房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人 市立市川考古博物館 1983年

「山田水呑遺跡」 日本道路公団・山田水呑遺跡調査会 1977年

「布佐・余間戸遺跡」 我孫子市布佐・余間戸遺跡調査会 1981年

「塚」出土の遺物について

出土遺物について考えていく前に「塚」の所在する千葉県山武郡横芝町長倉地区の歴史的変遷を概観しておきたい。

源順の撰録になる『和名類聚抄(和名抄)』(平安初期終末の承平年間(931~938)に成立)には、諸国の郡郷に関する記載があり、その中の上総国の条に、「武射郡長倉郷」という郷名が見える。この長倉郷の比定地としては、今回調査が行われた横芝町長倉の周辺地域を挙げることができる。^(注1)当時武射郡には、巨備、加毛、理倉、狎猿、^(注2)長倉、畔代、片野、大藏、新居、新屋、埴谷の11郷があり、既に律令体制期において長倉は、周辺地域を含めて一郷を形成していたことは明白である。また、古代の地名を現在に残している地区もある。

平安時代の中期以降になると、各地に莊園が発生するが、理倉、狎猿、長倉の諸郷(現横芝町域)^(注3)は、やがて山辺庄内に組み込まれていく。山辺庄内の中世郷村のうち、現横芝町域に該当する郷村は、高谷郷、坂田郷、中台郷、栗山郷の4郷が知られ、長倉地区は、中台郷(長倉姥山、遠山、中台)^(注4)に属していたようである。当時、それらの郷村は、中世土豪層の統治下にあったが、長倉は、地区内に居館(長倉城)を構えた三谷胤良(第6代千葉介胤政の子胤廣を祖とする)^(注5)の直接支配を受けるようになる。やがて、台頭してきた飯船城(現芝山町)^(注6)の城主山室氏の客将であった井田刑部大輔を祖とする井田氏の支配下に属するようになり、その後元和年間(1615~1624)以降明治に至るまでは、旗本岡部氏〔寛文8年(1668)頃の領主は、岡部丹波守(600石)^(注7)〕の知行地に入していくのである。

出土遺物について

双盤 青銅鋳造の双盤であり、上面の径は15.0cm。肩の幅は5.0mm、2段の盛上りを見せており単圈の2線をもって内区と外区を分けている。内区中央の同心円帯は水平で、直径10.50cmを測り、0.3mm~0.4mmほどの凸帯を呈している。総体的に鋳上りは良好であり、上面の一部は腐蝕によって旧態をとどめていないが、残存部分は磨き抜かれて見事な出来栄えを示しており、鋳造技術の優秀さを窺い知ることができる。胴上部には、架へ懸垂するための一孔(6.5mm)を有する魚形状の耳(鉢・長さ4.30cm、幅4.5mm)が一对をなしている。なお、胴(厚さ1.0mm)の

下端部には、幅1.30cmほどの駒の爪状の張り出しがあり、底部周縁には、幅1.20cmの側縁を繞らせている。裏面に向って右の側縁には、「天下一越後守二郎兵衛」と読める陰刻銘が認められる。

「天下一」の称号を与えたのは、織田信長が始めであるといわれ、鏡師だけでなく、他職の工人にも与えたようである。元亀4年(1573)7月、京都奉行村井貞勝が出た定書には「各工人が内評議をした上で、各業一人を公許する」とあり、その間の事情をよく物語っている。しかし、信長時代にも天下一を自称する工人が多く、江戸時代に入ると称号公許制は崩れて、とくにその数を増したということである。^(註6)

双盤は、密教法具のうちの梵音具として用いられているが、元来は釣鉦鼓の変形であって、古くは2個を架に懸けて使用したために双盤といわれたが、現在では1個を架にかけて使用する例が大部分のようである。また、主として淨土宗、時宗、融通念佛宗などの引声念佛の時に使用されるという。梵音具の中には、鉦鼓からの変形といわれるものに、この双盤と伏鉦^(註7)がある。伏鉦は、裏面の口縁部に3本の低い脚をつけたものであり、下に木台を置き、その上に伏鉦を置いて叩くものであるが、鉦鼓は、裏面を丁字形の檀木で打つのが法であるといわれる。^(註8) 双盤も伏鉦と同様に、上面の同心円帯を檀木によって叩いたのではないかと思う。本尊の厨子開扉の合図に現在も使用されている智恩院(京都市)の双盤も、上面を鼓面としているようである。

なお、鉦鼓の上面は全体に膨らみを持つのに対し、双盤及び伏鉦は水平である。これは、両者とも中央の同心円帯が、鐘座の機能を果していると言えうことができよう。また、本塚出土双盤の製作時期については、事例把握が不充分であるので断言することは差控えるが、室町期の終末から江戸初期の作と考えたい。

和鏡 出土和鏡は2面であり、ともに青銅製の円鏡である。No.3(亀甲地双雀鏡)は、直径11.60cm、緑高8.5mm、重量は190g、鏡座は菊座であり、鈕は円錐の頂部が丸味を帯びて、断面が弓型を呈する穹窿^(註9)鉦の範疇で捉えて良いものと思う。界圖(直径8.60cm)は、単圈の1線であり、緑は直角式の中縁(幅3.0mm)となる。

鏡面は、腐蝕が甚しく旧態を窺うことは難かしいが、鏡背は亀甲の花菱文を地文としており、他の和鏡に比して単調であるが、素朴で優美である。また、鏡座の下部には、嘴を接する2羽の雀が飛翔する姿を陽鏤しており、東京国立博物館所蔵の「亀甲地双雀鏡」(鎌倉時代)と酷似している。あえて若干の相違点を挙げるならば、東博所蔵鏡には、鈕の突端部に菊花状の文様^(註10)が見える。また、双雀の飛翔する様態は、東博所蔵鏡が離れて向い合う姿を呈しているのに対し、本鏡は、嘴を接するほどに接近していることを指摘することができる。なお、鏡背の鏡上り状態を見ると総体的に不鮮明な点のあることを見逃すことができない。ここでは、本鏡と東博所蔵鏡との類似点を強調したいが、すべての面から見て製作年代については、鎌倉期の和鏡

製作技術を継承した粗製の円鏡であり、室町期の作と考えたい。

No.2（州浜松竹梅双鶴鏡）は、直径11.60cm、縁高1.50cm、重量410g。鏡背の鉢は亀甲鉢であり、背甲には、亀甲花菱文を表出している。界囲は、脂線二重圓（外径8.50cm）であり、縁は直角式厚縁（幅5.0mm）の部に入る。鏡面は、腐蝕部分も多いが、一部に旧態をとどめており、よく研磨されていて相対する人の輪郭をうつすらと写し出すほどである。後述せる通り、埋納時に漆塗りの鏡箱に入れられ、相当期間土砂から保護されていたためではないかと思われる。

鏡背の文様を観察すると、亀鉢の上部中央には、やや違和感をもつ程の大形な梅花一輪を配して、その右下には、松の大樹が大きく枝を張り、外区の上部を覆っている。その根本近くには、3本の竹が見えて笹の葉が中央の亀鉢を包んでいる。さらに、向って左手の外区には、竹林があり、松樹の後背を笹の葉で埋めている。また、亀鉢の左手に直立している鶴の足元から右手にある松の根本にかけて砂州が見える。鏡背の文様で特記しておくべきことは、亀鉢の亀と双鶴の三者が接嘴する姿を表出していることである。なお、鏡背を飾る松・竹・梅は、周知の通り瑞祥文であり、亀と鶴は長寿文である。それぞれの文様は肉厚である。

重量は、時代の下降に従って増していくといわれ、本鏡は、No.3の円鏡の2倍強に当る410gであり、室町時代末期から江戸時代にかけて用いられたという二重圓や室町末期に出現する亀と双鶴が接嘴することなどを考え併せて、本鏡は、室町時代の終末から江戸時代初期に製作されたものと考えて良いのではないか。

なお、双盤と和鏡（No.3）の間から検出された漆の残片は、おそらく漆塗り仕上げの鏡箱の木質が腐り、漆の一部が残ったものであろう。また、鏡背を上にした鏡の下に密着して検出された円形の薄板は、矢張り曲物状のもので作られた鏡箱の残片（杉か）であろう。鏡面に密着していたために円形に残ったものと思う。

古鏡 出土した古銭12枚のうち1枚（No.3～6）を除き、すべて寛文8年（1668）から天和3年（1683）までの16年間に、武藏国江戸亀戸村（現東京都台東区亀戸）の銭座において鋳造された寛永通宝（新寛永銭）である。この寛文期に鋳造された寛永通宝が、新寛永銭の先発銭として採用された理由には、卓越した鋳造技術、毅然たる銭風にあるといわれている。

前述の通り、出土銭のうち11枚は“新寛永銭”。部類に入るが、面文（「寛永通寶」）及び背文（「文」）の書体は、古寛永銭に比して鮮明であり、細字であることが注意される。直径は、ほとんどが約2.50cm、肉厚約1.0mm～1.5mm、面の縁の幅は平均2.5mmで、万延元年（1860）以降の寛永銭に見られる潤縁（銭のヘリの幅が広いもの）に対して中縁と言うべきであろう。また、穿（銭の中央にある四角い穴）のヘリ（郭）は狭く、細郭の部に入る。なお、同じ寛文銭でも通常面文及び背文に若干の差異が認められ、島屋文銭とか、細字背文銭、細字小文銭など13種ほどに細別されるようであるが、遺憾ながら鑑識眼に乏しいので銭貨個々の細分については、

専門家の鑑定に託さざるを得ない。よって本稿では、その労をとらず銭風の観察のみにとどめた。

俗に「文銭」と呼ばれるこの新寛永銭は、背文に「文」の字を入れて古寛永銭(寛永3年(1626)から明暦2年(1656)まで、各地で鋳造された)と区別したという。面文の「寛」と背文の「文」によって寛文期の新銭としたという説もあるが定かではない。古寛永銭が、鋳造技術の進歩により、彫母銭(種銭)の書体がそのまま通用銭に伝えられるという。画期的な手法(彫母銭→錫母銭→銅母銭→通用銭)が用いられたといわれる。当時、さぞかし江戸市民の耳目を^(注14)集めたであろうし、「新寛永銭」と呼ばれるに相応しい優美な新銭であったに違いない。

「No.3~6」については、直径2.40cm、肉厚が約1.0mm、面の縁も2.0mmとやや狭く、無文である。面文の書体は、寛文期のそれと比較するとやや大き目で、その書風から、明暦2年(1656)に、武藏国江戸鳥越(現東京都台東区鳥越)の銭座で鋳造された通称「鳥越銭」と呼ばれる銭に近似しているように思える。断言することは憚るが、少なくとも古寛永銭であることは間違いかどう。

なお、本文にて報告されている通り、古銭12枚が、①和鏡の鏡背上(No.2)②双盤中に収納された形で出土した和鏡の鏡背下(No.3)の2ヵ所で、それぞれ6枚ずつ紐通しをしてあったような形跡を残して出土しているが、六道信仰に基づく「六道銭」としてではなく、奉納銭と考えた方が無難のように思える。

瓦製小皿 俗にカワラケと呼ばれている素焼の粗製小皿であり、2個のみの出土という点から考えてみると、密教法具の一つとして仏前供養の際に用いられる六器の一部であるのか、或いは、衆生に対して仏陀の加持保持を祈禱する際の二器(瀧水器、塗香器)^(注15)であるのか、または、単なる仏供皿であるのか、については断定し難い。

もともと六器というのは、仏前において修法を行うときに、火舎(香炉の一種で焼香器)を中心にして左右に3個ずつ並べるものであり、内側から關伽(浄水を)、塗香(香を)、華鬘(花を)の器とされ、6個を合わせて一組となる。また、二器とは、瀧水と香水を歎^(注16)して身のけがれを除き、道場や供具を淨める意味をもつものである。ともに青銅製であり、密教法会には欠かせない法具ということができる。しかし、中には、京都花背別所町の経塚のように、粗製の瓦製六器が出土したという事例もある。^(注17)(東京国立博物館蔵・12世中葉)ただし、上記の出土例については、六器のほかに、同じ瓦製の火舎、飯食器、花瓶も出土しており、密教の修法によって埋められたことを物語っている。

No.4、No.5の小皿については、上記経塚出土の瓦製六器に近似しているが、2個のみの出土であり、2個を一組として使用したとすれば、六器ではなく二器の模造土製品である可能性が強い。しかしながら他の出土遺物から見ても、多くの法具(大壇供、護摩壇供、密壇供等)^(注18)を

捕えて密教的法会を行ったとは思えない。そこで、本塚が千部塚であるとすれば、千部読経（千部会）の法会を行った際に、仏前に供える単なる仏供皿（飯食器の一つで洗米をのせる）ではないかと考えている。

「塚」には、伝説や民俗が結びついている場合があり、今回調査された「塚」もその一例として捉えることができる。調査員の話によれば、「里人たちは、この塚を“せんぶ塚。（千部塚）と呼んでいる」という。若し、千部塚であるとすれば、ある人物（有力寺院の高僧か）の追善供養のために、多くの僧がこの地に集い、或いは単独で経典千部を読誦し終えたことを記念して、千部会の法会を行い、その際に用いられた仏具などを埋納した後に、塚を築いたのではないか。ここで問題にすべき点は、千部経の読誦後この經典を埋納したか否かという点であるが、現在のところ、埋経の際に用いられる経容器（銅製、鉄製、陶・磁製の経筒等）の出土が見られない。したがって、経塚と捉えるには問題がありそうに思える。しかし、上記のような経筒には入れず、木箱の中に經典を納めたとすれば、その痕跡は残るすべもなかろう。

ちなみに、埼玉県御堂の妙栄山淨蓮寺に、「南無妙法蓮華經 奉讀誦大乘經千部成就(以下略)……文祿四乙未年(1595)四月八日……」と陰刻された題目板碑がある。明らかに千部会に関連する資料であり、大乘經の經典千部の読誦成就を記念して建立された板碑である。千部会そのものが經典の読誦が主体であるので、上記淨蓮寺の例のごとく埋經行為は行わず、法会の完了を記念して塚を構築したと見て良いのではなかろうか。

千部塚と呼ばれる塚は各地にあるようだが、一例を挙げるならば、東金市御林にある墓地の一角に3基の塚があり、その付近一帯を千部塚と呼んでいるという。また、和鏡や古錢等の出土例としては、東金市家之子古墳群中の「カネ塚」（方錐形、一辺9m）から、腐朽破損の激しい朱塗りの箱が検出され、その箱の内外にて、和鏡（蓬萊鏡）と古錢121枚（寛永通宝118枚のうち、文錢が65枚。ほかに中世の古錢3枚）が出土したという事例がある。（立正大学の丸子亘氏によって調査された）出土遺物から見て、本塚との類似点を多く見出すことができる。ここでも埋經の形跡は確認できなかったようである。なお、遺憾ながら他例の収束が不充分ではあるが、山武地方において“千部塚”と呼称される塚が存在したことは明白であり、かかる仏教的習俗がこの地域に普及していたことを語る遺構であることは間違いない。

さてここで、出土遺物から「塚」の築造時期を考えていこうと思う。その時期は、双盤、和鏡、古錢、瓦製小皿など、出土遺物の埋納時期と一致することは言うまでもない。出土遺物のうち、最も新しい時期に該当するものは古錢12枚である。しかもそれは、明確に時期を決定できる要素をもった遺物もある。そのうち11枚は通称“文錢”と呼ばれる寛永通宝であるから、前述の通り寛文8年（1668）以降であることは間違いないが、通常寛永錢の出土例を見ると、ほとんど各時期の鋳造錢が混在して出土するものである。しかし本例では、出土錢12枚の

うち“文銭。が11枚もまとめて埋納されており、無作為的に12枚の通用銭を揃えたと思えることから、寛文8年（1668）から天和3年（1683）の間、または、それに近い時期であったと考えて良いのではなかろうか。

（藤下昌信）

- 注1 池邊 優『和名類聚郷名考證』吉川弘文館 昭和45年3月1日
- 注2 伊藤一男「千葉氏の繁栄と郷土」『横芝町史』千葉県山武郡横芝町 昭和50年3月22日
- 注3 千葉県開府八百年記念協賛会編『千葉大系図』同協賛会 大正15年6月1日
- 注4 伊藤一男「戦国井田領の形成と展開」『横芝町史・特別寄稿編』千葉県山武郡横芝町 昭和50年3月22日
- 注5 川村 優「徳川氏と郷土の支配」『横芝町史』千葉県山武郡横芝町 昭和50年3月22日
- 注6 中野政樹編「和鏡」『日本の美術No.42』至文堂 昭和44年11月5日
- 注7 香取忠彦「梵音具」「仏具大辞典」鎌倉新書 昭和57年4月20日
- 注8 久保常晴「仏具」「新版考古学講座8・特論(上)』雄山閣 昭和46年9月10日
- 注9 注7に同じ
- 注10 注6に同じ
- 注11 注6に同じ
- 注12 小川儀吉編「新寛永銭鑑識と手引」万国貨幣研究会 昭和31年8月30日
- 注13 前書に同じ
- 注14 小川浩編「寛永通寶銭譜・青寶樓藏版」内外貨幣研究会 昭和35年
- 注15 前書に同じ
- 注16 岡崎謙治「密教法具」「仏具大辞典」鎌倉新書 昭和57年9月20日
- 注17 前書に同じ
- 注18 注16に同じ
- 注19 藏田一藏「經塚の諸問題」「世界考古学大系4・日本IV」平凡社 昭和36年7月31日
- 注20 石田茂作「密教法具概説」「佛教考古学講座III・仏法具編(上)』雄山閣 昭和45年11月25日
- 注21 久保常晴「埼玉県御堂淨蓮寺の金石文」「佛教考古学研究」ニューサイエンス社 昭和42年11月1日
- 注22 川戸彰「東金市発見の塚に関する覚書」「千葉文庫6」千葉県文化財保護協会 昭和47年12月20日
- 注23 前書に同じ

VI 総 括

長倉宮脇遺跡では、古墳時代・奈良・平安時代の集落と、江戸時代の「塚」が発掘調査されました。古墳時代は、日本歴史の中で唯一、巨大な墓（古墳）を造営した時代で、西暦 200 年後半頃から奈良時代までの、約 400 年間がその時代として位置づけられています。古墳時代は、考古学上では、前期・中期・後期の 3 期に分けられており、本遺跡は後期にあたるものです。

今回の調査で検出された遺構は、住居址でした。地面を垂直に掘りくぼめ、4 本の棟柱によって上屋を支え、壁に作り付けのカマドを備えた竪穴式住居です。竪穴住居は、古く縄文時代から存在し、弥生時代を経て、古墳時代さらには奈良・平安時代まで連続と続く住居形態です。形や規模、付属施設は、時代によって異なりますが、古墳時代のものは方形を呈するのが一般的です。

出土遺物は、土器が主体を占めています。考古学では、この土器の研究が進んでおり、それらの作られた年代を知ることができます。古墳時代の土器は、土師器、須恵器（窯で焼かれた灰色の堅い土器）と呼ばれています。それぞれの土器は、「型式」という概念でとらえられており、作られた時代や地域を限定するものです。考古学では、この土器型式を、古い方から新しい方へと並べ、編年体系を作り上げています。千葉県の属する南関東地方では古墳時代の土器（土師器）は、五領式土器（前期）、和泉式土器（中期）、鬼高式土器（後期）と呼ばれ、さらに奈良時代の土器を真間式土器、平安時代の土器を国分式土器と編年されています。これらの名称は、いずれもその発見された遺跡の名称で、五領式土器は、埼玉県東松山市五領遺跡の土器をその標式とし、和泉式土器は、東京都狛江市和泉遺跡、鬼高式土器は、本県市川市鬼高遺跡、真間・国分式土器も市川市須和田遺跡出土の土器を、それぞれその標式としています。

本遺跡出土の古墳時代の土器は、いずれも後期の鬼高式土器に属するもので、西暦 500 年頃から 700 年頃までの約 200 年間使われていたものです。第 6 号住居址、第 10 号住居址の土器が最も古く 6 世紀の前半、第 7 号住居址が 7 世紀頃、第 8 号住居址、第 9 号住居址が、7 世紀前半頃と考えられ、古墳時代の 6 軒の住居址は、同時に存在したものではなく、集落の変遷を知ることができます。土器以外の出土遺物で特異なものは、第 9 号住居址から出土した耳環があります。これは古墳の副葬品として出土するもので、住居址出土例は、あまり多くありません。

奈良・平安時代には、竪穴住居の地に、平地式の住居が本県においても知られるようになります。地面に柱を入れた穴が残っており、掘立柱建物跡と呼ばれています。本遺跡のピット群も、おそらく掘立柱建物跡と考えられます。明確に 2 間 × 3 間などの位置を示していないため、棟数や規模を知ることができませんでした。住居址は、古墳時代と大差なく、竪穴住居が作られています。この時代も、やはり土器によってその年代を知ることができます。

奈良時代の住居址は、第 1 号住居址、第 2 号住居址で、8 世紀の前半～中葉に位置づけられ

ます。出土土器は、真間式土器と呼ばれるものです。この2軒は重視して検出されており、その切り合い関係から、第2号住居址の方が古いことが判明しています。

平安時代の住居址は、第3・4・5・11号住居址です。この時代の土器は、国分式土器と呼ばれています。出土土器の年代から、第3号住居址が9世紀前半、第4号住居址が9世紀後半、第5号住居址・第11号住居址が10世紀前半～中葉に比定されました。また、倉庫ないし掘立柱建物跡と考えられたピット群より出土した土器は、9世紀末～10世紀初頭に位置づけられました。従って、第4号住居址より新しく、第5・11号住居址よりは古い時代に構築されたと考えられます。また、第4号住居址出土の須恵器大甕は、ほぼ完形品で貴重な資料です。

以上の結果から、本遺跡の集落は、6世紀の前半から10世紀の中葉にかけて、500年以上も営まれていたことが推定されました。しかし、未発掘の周辺域にも、住居址の存在が予想されるため、集落が継続したのか、断続的だったのかは、判然としません。これは、今後の研究課題として、将来の調査・研究に期したいと思います。

「塚」は、出土した寛永通宝から、江戸時代初期に作られたものであることが判りました。県内には多くの「塚」が存在しますが、古墳とは異なり、遺物が出土しない例が多いようです。従って今回の「塚」のように遺物が伴出るのは貴重な資料となります。

遺物は、仏具の双盤、仏供皿と和鏡、寛永通宝でした。築造年代は、寛永通宝の作られた年代により、寛文年間（1661～1673）から天和年間（1681～1684）頃であったと推定されます。

（村山好文）



遺跡遠影



遺跡近景及び遺構確認作業



住居址発掘風景



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址遺物出土状態



第4号住居址須恵器大壺出土状態



第4号住居址

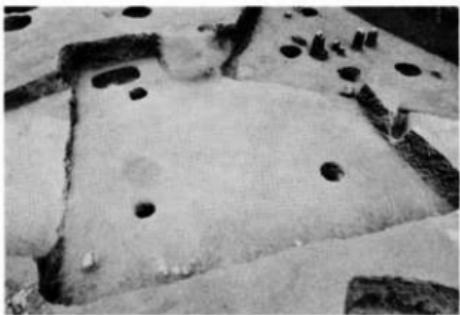
図
版
4



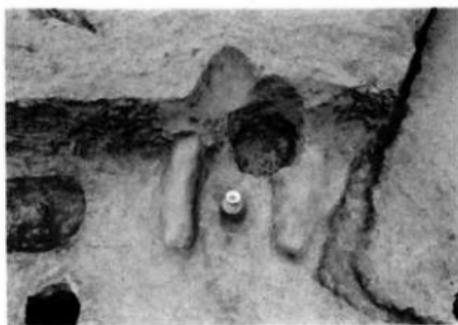
第4号住居址カマド



第5号住居址



第6号住居址



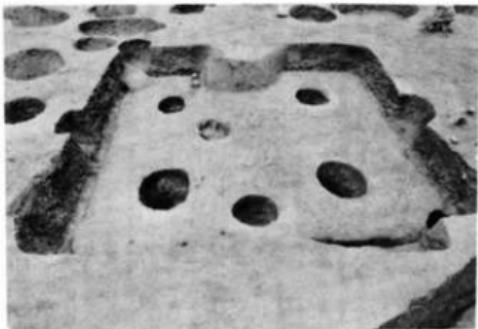
第6号住居址カマド



第7号住居址



第8号住居址



第9号住居址



第10号住居址



第10号住居址贮藏穴内遗物出土状态



第10号住居址カマド



第11号住居址



第12号住居址



ピット群



発掘後の遺跡



「塚」遠影



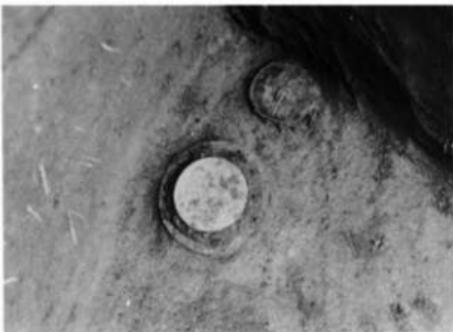
「塚」近影



「塚」北東区遺物出土狀態



「塚」No.1、2出土狀態



「塚」No. 3出土状態



「塚」No. 4・5出土状態



「塚」南西区セクション



住1・1



住1・3



住1・4



住2・1



住4・1



住4・7



住4・3



住4・9



住4・5



住4・10



住4・14



住4・12



住4・15



住4・13



住5・1



住5・4



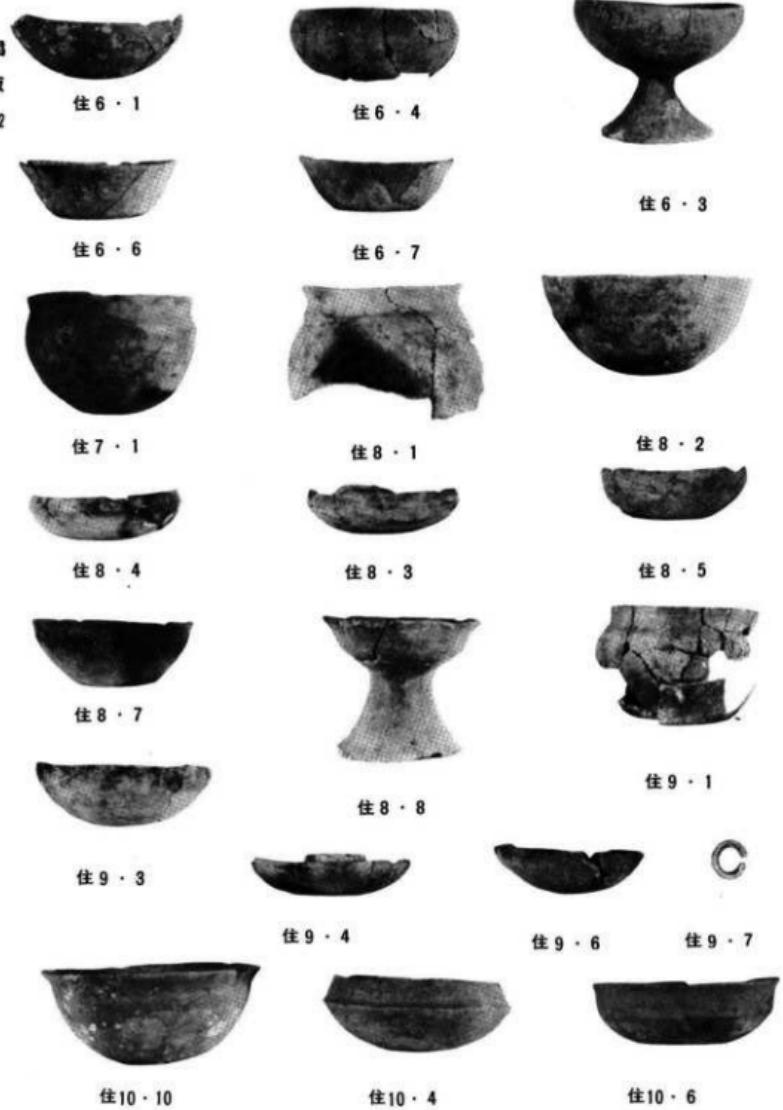
住5・3



住5・14



住5・15

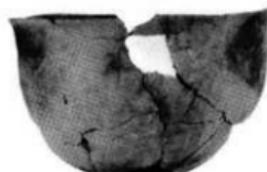




住10·1



住10·2



住10·3



住10·7



住10·8



住10·1



住10·15



住10·14



住10·9



住10·16



住10·12



住10·11



住10·21



住10·19



住10·18



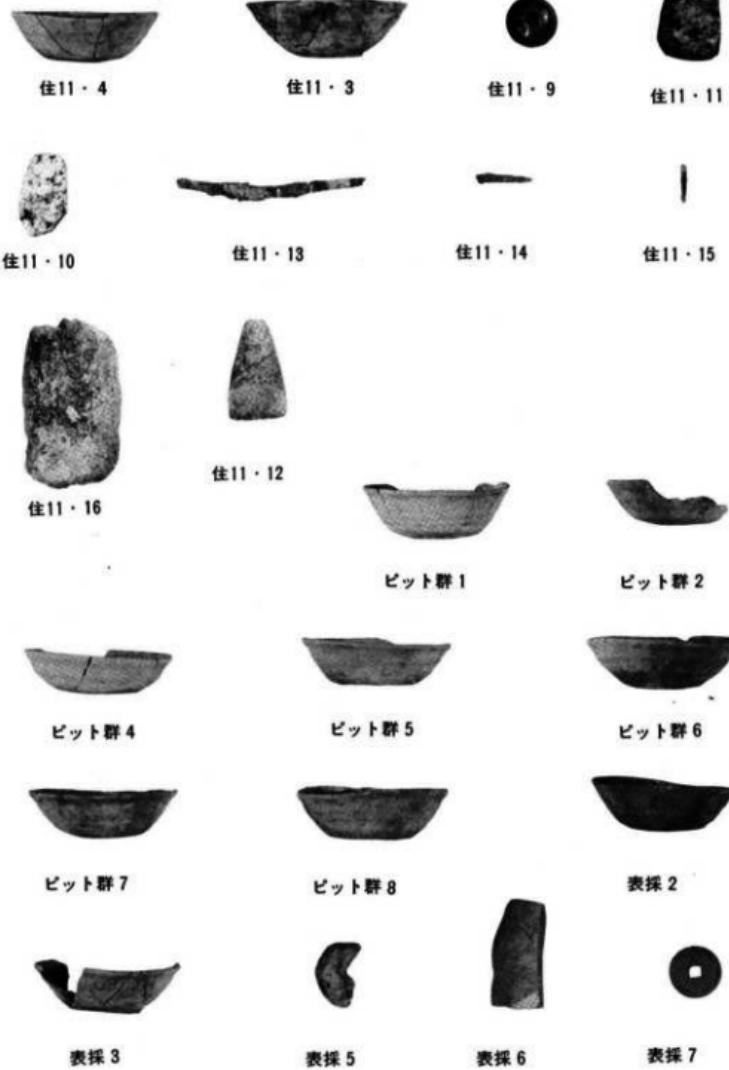
住10·20

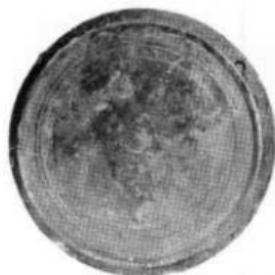


住10·22



住10·23





「塚」No. 1 表面



「塚」No. 1 裏面



「塚」No. 1 陰刻銘



「塚」No. 2



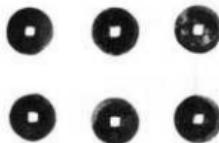
「塚」No. 3



「塚」No. 4



「塚」No. 5



「塚」No. 2 宽永通宝

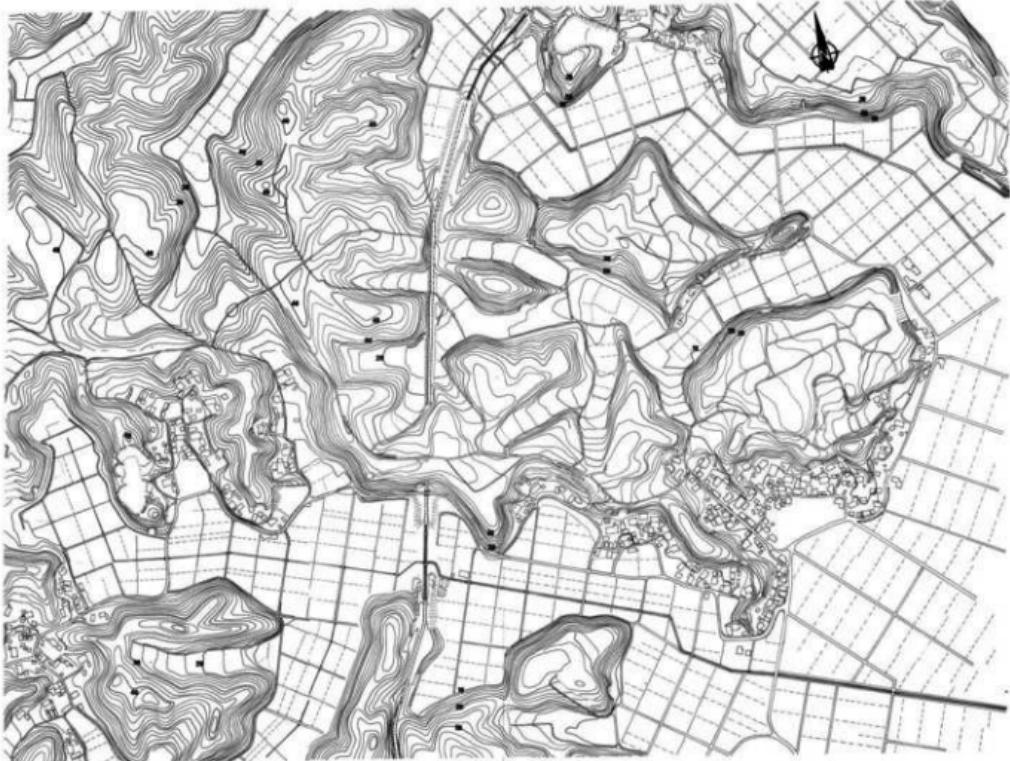


「塚」No. 3 宽永通宝

千葉県横芝町長倉宮臨遺跡発掘調査報告書

長倉宮脇

発行 横芝町教育委員会
印刷 佐原印刷株式会社



付図 遺跡周辺の地形図 (1:5,000)